

平成30年度（第3回）
足立区政モニターアンケート
調査報告書

《子どもの貧困対策について》



足立区 政策経営部 広報室 区政情報課

目次

第 1 章 調査の概要	1
1 調査の目的.....	2
2 調査の時期.....	2
3 今回の区政モニター数、回答者数.....	2
4 回答者の構成.....	3
5 報告書の見方.....	4
第 2 章 調査結果の概要及び所管意見.....	5
● 設問体系と回答の概要.....	6
● 所管意見まとめ	9
第 3 章 調査結果の分析及び課題.....	13
1 身近にある子どもの貧困について	14
1－1 子どもの貧困の実感有無【問 1】	15
1－2 子どもの貧困を感じた場面【問 1－1】	17
1－3 貧困状態にある子どもの家庭の増減実感【問 2】	18
2 子どもの貧困問題への関心	19
2－1 子どもの貧困問題への関心有無【問 3】	20
2－2 子どもの貧困問題に関心がある主な理由【問 3－1】	21
2－3 子どもの貧困問題に関心がない主な理由【問 3－2】	22
3 子どもの貧困に対する問題意識.....	23
3－1 子どもの貧困状態の問題認識有無【問 4】	24
3－2 子どもの貧困がもたらす影響【問 5】	25
3－3 子どもの貧困問題が国の経済損失につながることの認知【問 6】	27
3－4 子どもの貧困対策の必要性が理解されにくい主な理由【問 7】	28
4 子ども達のための地域活動について	30

4-1	地域の子ども達のための活動への参加有無【問8】	32
4-2	活動に参加していない理由【問8-1】	33
4-3	活動したいと思わない理由【問8-1-1】	35
4-4	子どもの経験・体験活動を充実させるために重要だと思う取り組み 【問9】	36
4-5	地域の子ども達のための活動を行う際に必要な情報【問10】	38
5	区の子どもの貧困対策について	40
5-1	区が全庁で子どもの貧困対策に取り組んでいることの認知有無 【問11】	41
5-2	子どもの貧困対策として重要だと思う区の取り組み【問12】	43
5-3	子どもの未来を応援する講演会や交流会への参加意向【問13】	45
●	アンケートの有効度【問14】	46

第4章 調査票..... 47

●	使用した調査票	48
---	---------	----

第 1 章 調査の概要

第1章 調査の概要

1 調査の目的

足立区では、「次代の担い手である子どもたちが「生き抜く力」を身につけ、自分の人生を自ら切り開き、貧困の連鎖に陥ることなく社会で自立していくこと」を基本理念のひとつとして、平成27年度に「未来へつなぐ あだちプロジェクト（足立区子どもの貧困対策実施計画）」を策定し、全庁を挙げて子どもの貧困対策に取り組んでいます。

プロジェクトを進める中で、子どもが地域活動に積極的に参加して経験・体験を積むことで、生活困難な状況でも逆境を乗り越える力が養える可能性が見えてきました。

今回のアンケートにより、「子どもの貧困に対する関心」や「子どもの経験・体験活動を充実させるための取り組み」などについて、区民の皆さまのご意見を把握することを目的として調査を実施いたしました。

2 調査の時期

平成31年1月30日（水）～2月12日（火）

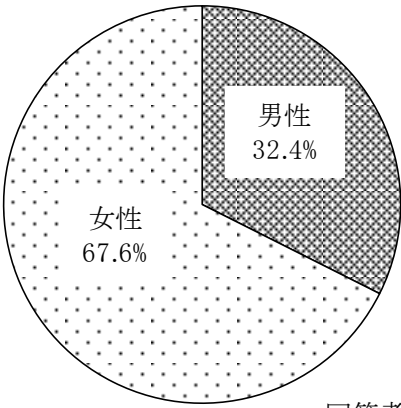
3 今回の区政モニター数、回答者数

区政モニター数	191人
回答者数	179人（回収率93.7%）
[内訳]	
郵便回答	110人
インターネット回答	69人

4 回答者の構成

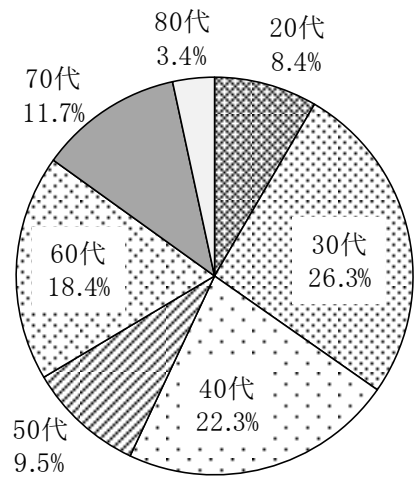
(1) 性別、年代別割合

【性別】



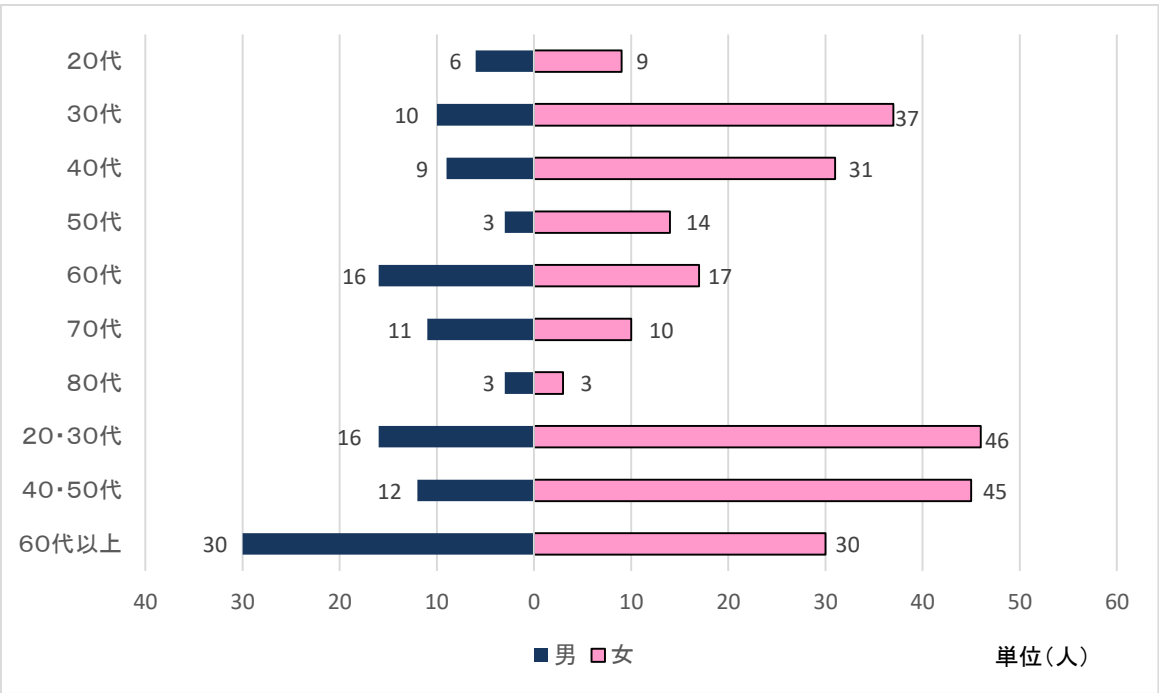
回答者数 = (179)

【年代】



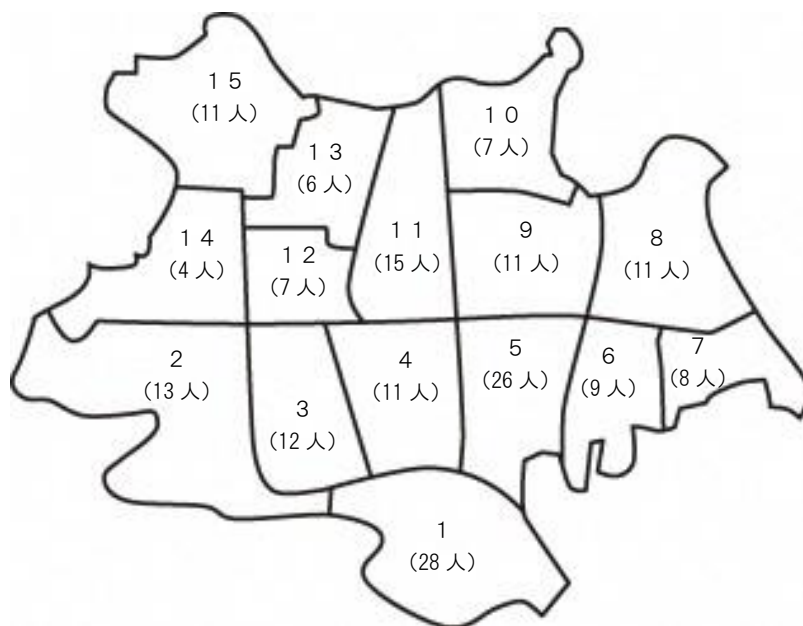
回答者数 = (179)

【性・年代】



第1章 調査の概要

(2) 地域別回答者人数 (上段：地域番号、下段：人数)



5 報告書の見方

- (1) 回答比率(%)は、その設問の回答者を基礎として算出しました。小数点第2位を四捨五入して小数点第1位まで示したもので、比率の合計が100.0%に満たない、または上回ることがあります。
- (2) 複数回答の設問は、すべての比率を合計すると100.0%を超えます。
- (3) 選択肢の表記は、グラフ・数表では全文言を記載していますが、分析コメントにおいては、括弧内の語句を簡略化していることがあります。
- (4) 本報告書に掲載しているクロス集計は、10才刻みの「年代別」、および、20代と30代を合わせた20代・30代(若年層)、40代と50代を合わせた40代・50代(中年層)、60代から80代を合わせた60代以上(高齢層)の3層からなる「年齢層別」の2種類です。10才刻みの「年代別」については、複数の年代でサンプル数が30未満と少数であるため、参考値としての掲載にとどめ、クロス集計の分析では主に「年齢層別」について言及しています。

第2章 調査結果の概要及び所管意見

● 設問体系と回答の概要

1 身近にある子どもの貧困について

1-1 子どもの貧困の実感有無【問1】・・・P15

- ・「身近に感じたことがある」37.4%
- ・「身近に感じたことはない」62.0%

1-2 子どもの貧困を感じた場面【問1-1】・・・P17

- ・「体や髪が清潔に保たれていない」49.3%
- ・「夜間、子どもだけで過ごしている」46.3%

1-3 貧困状態にある子どもの家庭の増減実感【問2】・・・P18

- ・「増えている」18.4%
- ・「あまり変わらない」20.1%
- ・「減っている」6.7%
- ・「わからない」51.4%

2 子どもの貧困問題への関心

2-1 子どもの貧困問題への関心有無【問3】・・・P20

- ・「関心がある」89.9%
- ・「関心がない」10.1%

2-2 子どもの貧困問題に関心がある主な理由【問3-1】・・・P21

- ・「社会全体で解決すべき問題だと思うから」42.2%
- ・「ニュースなどでよく報道されているから」21.1%

2-3 子どもの貧困問題に関心がない主な理由【問3-2】・・・P22

- ・「身近な問題ではないから」44.4%

3 子どもの貧困に対する問題意識

3-1 子どもの貧困状態の問題認識有無【問4】・・・P24

- ・「問題だと思う」97.8%
- ・「問題だとは思わない」1.7%

3-2 子どもの貧困がもたらす影響【問5】・・・P25

- ・「こころの状態が不安定になる」74.9%
- ・「必要な食事がとれない、または偏った食事によって健康上のリスクが増える」72.6%
- ・「いじめや孤立の原因になる」67.0%
- ・「暴力や養育放棄などの虐待のリスクが増える」65.9%

3-3 子どもの貧困問題が国の経済損失につながることの認知

【問6】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 2 7

- ・「知っている」66.5%
- ・「知らない」31.8%

3-4 子どもの貧困対策の必要性が理解されにくい主な理由

【問7】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 2 8

- ・「子どもの貧困は家庭の責任だと思う人がいるから」47.5%
- ・「自分には関係ないと思う人がいるから」23.5%

4 子ども達のための地域活動について

4-1 地域の子子ども達のための活動への参加有無【問8】・・・ P 3 2

- ・「ある」19.6%
- ・「ない」80.4%

4-2 活動に参加していない理由【問8-1】・・・ P 3 3

- ・「活動したいが、時間がない」45.8%
- ・「活動したいが、活動に関する情報がない」40.3%
- ・「活動したいと思わない」16.0%

4-3 活動したいと思わない理由【問8-1-1】・・・ P 3 5

- ・「時間がない」43.5%

4-4 子どもの経験・体験活動を充実させるために重要だと

思う取り組み【問9】・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 3 6

- ・「放課後子ども教室・学童保育室・児童館などでのさまざまな体験活動」68.7%
- ・「学校や家以外での学習支援の場の提供」65.9%
- ・「親以外の大人との交流の機会提供」45.3%
- ・「スポーツ体験の場の提供」42.5%

4-5 地域の子子ども達のための活動を行う際に必要な情報

【問10】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 3 8

- ・「利用できる場所の情報」73.7%
- ・「参加・利用できる団体の情報」72.1%
- ・「行政からの支援（補助金等）の情報」57.0%

5 区の子どもの貧困対策について

5-1 区が全庁で子どもの貧困対策に取り組んでいることの

認知有無【問11】・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 4 1

- ・「知っている」22.3%
- ・「知らない」76.5%

5－2 子どもの貧困対策として重要だと思う区への取り組み

【問 1 2】 P 4 3

- ・「学習支援（補習教室、無料塾、塾代の支援等）」81.0%
- ・「就学援助・入学準備金・育英資金等の教育資金の支援」64.2%
- ・「保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、相談・交流の場の充実」63.7%

5－3 子どもの未来を応援する講演会や交流会への参加意向

【問 1 3】 P 4 5

- ・「参加してみたい」（75.4%）
- ・「参加したくない」（23.5%）

● 所管意見まとめ

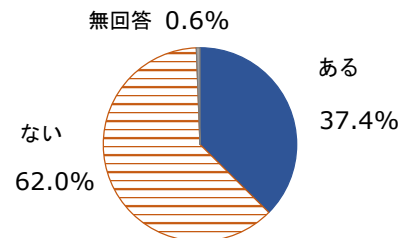
1 調査結果の概要

(1) 子どもの貧困について、身近に感じることは少ないが、関心はある。

- 子どもの貧困について、身近に感じたことがあるかとの問いに「身近に感じたことがある」は37.4%で、「身近に感じたことはない」は62.0%であった。年代別では、20～40代は約40%が「身近に感じたことがある」と回答しているが、50代は17.6%、60代は33.3%と低い数値になっている。

⇒詳細はP 15へ

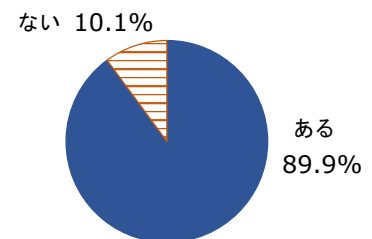
〔子どもの貧困について、身近に感じたことはあるか〕



- 上記のとおり、子どもの貧困を「身近に感じたことがある」人が少ない中、「子どもの貧困問題に関心はありますか」との問いには、89.9%が「関心がある」と回答しており、高い関心が寄せられている。

⇒詳細はP 20へ

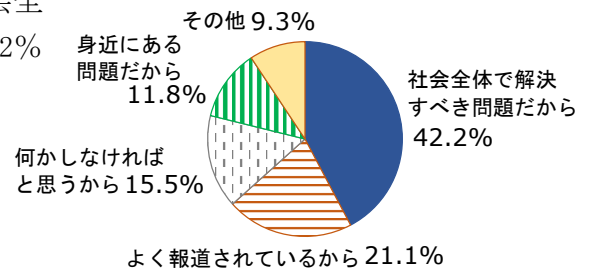
〔子どもの貧困問題に関心はあるか〕



- 子どもの貧困問題に関心がある理由は「社会全体で解決すべき問題だと思うから」が42.2%で最も多かった。

⇒詳細はP 21へ

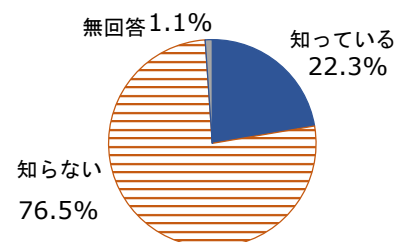
〔子どもの貧困問題に関心がある理由〕



- 足立区が全庁をあげて、子どもの貧困対策に取り組んでいることについては「知らない」が76.5%と高い割合になっている。年代別では、20代(93.3%)、30代(89.4%)は「知らない」と回答した割合が高い。区の実態が伺える。

⇒詳細はP 41へ

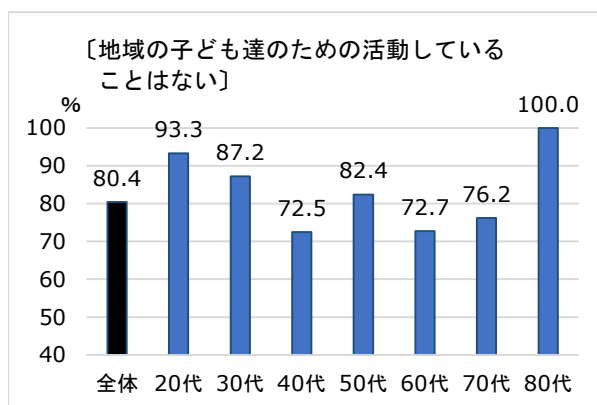
〔区が全庁を挙げて、子どもの貧困対策に取り組んでいることを知っているか〕



(2) 地域の子ども達のための活動には参加していないが、参加したいと考えている。

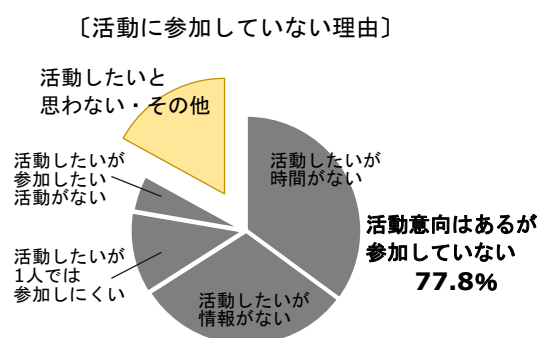
- 地域の子ども達のために「活動していない」と回答した人は 80.4%で、特に 20 代(93.3%)、30 代(87.2%)が高い数値となっている。

⇒詳細はP 3 2 へ



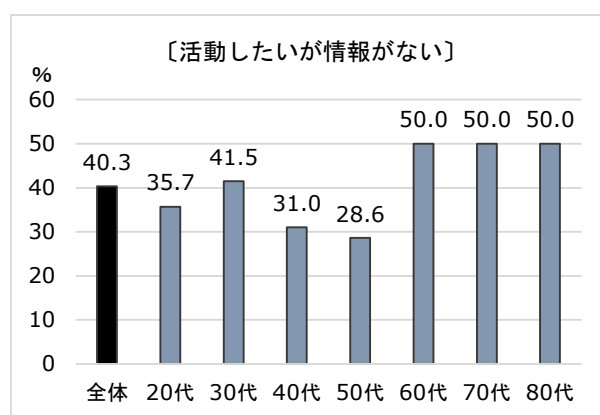
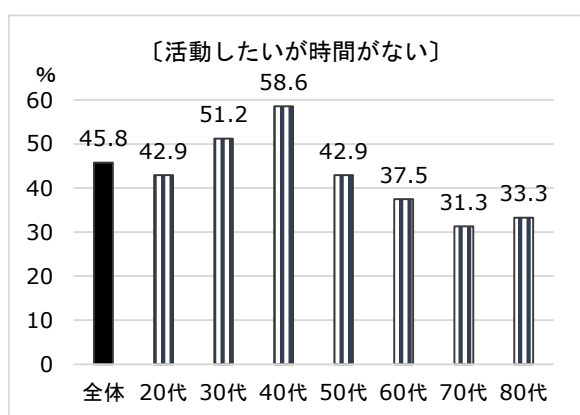
- 活動したいが「時間がない」「活動に関する情報がない」「1人では参加しにくい」「参加したい活動がない」との回答を合わせた『活動意向はあるが、参加していない』人を合計すると、全体の約8割になる。

⇒詳細はP 3 3 へ



- 活動に参加しない理由は「時間がない」が 45.8%で最も多く、20～50 代の割合が高くなっている。次に「情報がない」が 40.3%で多く、60～80 代では最多であった。時間がない中でもできる活動や活動に関する情報提供方法に課題が見える。

⇒詳細はP 3 3 へ



(3) 区取り組みとして重要なものは、さまざまな体験活動や学習支援である。

- 子どもの経験・体験活動を充実させるために重要だと思う取り組みでは、子どもが集まる場所での体験活動や学習支援が上位になった。

⇒詳細はP 3 6 へ

〔回答の上位〕

- 1 放課後子ども教室・学童保育室・児童館などでのさまざまな体験活動 68.7%
- 2 学校や家以外での学習支援の場の提供 65.9%
- 3 親以外の大人との交流の機会提供 45.3%
- 4 スポーツ体験の場の提供 42.5%

- 子どもの貧困対策として重要だと思う区の取り組みは、学習支援や教育資金が上位となった。

⇒詳細はP 4 3 へ

〔回答の上位〕

- 1 学習支援（補習教室、無料塾、塾代の支援等） 81.0%
- 2 就学援助・入学準備金・育英資金等の教育資金の支援 64.2%
- 3 保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、
相談・交流の場の充実 63.7%

2 今後の方針

(1) 身近な問題として考えてもらうための情報発信を強化する

- 子どもの貧困問題をより身近な問題として考えてもらうため、区民の方のみならず、区職員、教職員、委託事業者等に対して、子どもの貧困の現状や対策の必要性についての情報を発信する機会を増やす。各種研修、講演会、学習会の場を積極的に活用して、参加者の効果的な気づきにつながるよう、参加者の立場や役割などに合わせた講演・研修内容を充実させる。
- 特に、子どもの貧困問題は単に経済的な困窮だけを指すものではなく、経験・体験の乏しさや人とのつながりの欠如等も含まれるということや、その視点を持って自分の周りに目を向けることの大切さについて情報発信していく。
- 区の子どもの貧困対策についての認知度を上げるため、子どもの貧困対策の成果として、各事業の取り組み状況や地域団体・企業等の動きを、積極的に広報、ホームページ、プレスリリース等でPRしていく。

(2) 気軽に地域活動に参加できるような仕掛けや仕組みをつくる

- 地域の子ども達のための活動をしたいが「活動していない」層を地域活動等に取り込むため、協働・協創推進担当課や区民参画推進課と連携して、実際の活動につながる情報発信や仕掛けをつくる。団体の活動の様子や気軽に参加できるところをアピールするとともに、主に「時間がない」20～50代向けと「情報がない」60～80代向けそれぞれに対応できるように情報の媒体や記載内容も含めて検討する。
- 子どものために活動する団体同士がつながるプラットフォームをサポートし、子どもの未来を応援する活動団体交流会等を通じて、団体同士のネットワーク化を図る。団体の活動を活性化することで、地域活動の広がりにつなげていく。

(3) 重要とされる取り組みを「未来へつなぐ あだちプロジェクト」に反映する

- 経験・体験を充実させる取り組みとして重要だとされた「放課後子ども教室・学童保育室・児童館などでのさまざまな体験活動」「学校や家以外での学習支援の場の提供」等や、区の子どもの貧困対策として重要だとされた「学習支援」「教育資金の支援」「相談・交流の場の充実」等については、「未来へつなぐ あだちプロジェクト（足立区子どもの貧困対策実施計画）」の改定作業において、拡充・見直し等の検討をしていく。
- 子どもの貧困対策は「社会全体で解決すべき問題」だとの意見が多かったことを踏まえ、子ども全体が対象となる事業、個に応じた対応が必要とされる事業等、足立区の現状にあわせて、不足していると思われる事業の検討を行っていく。

第3章 調査結果の分析及び課題

1 身近にある子どもの貧困について

【現状】

子どもの貧困の実感有無（問1）【回答者数 179 名】

- 子どもの貧困を「身近に感じたことがある」と回答した人の割合は4割弱となっており、おおよそ3人に1人以上が、子どもの貧困を身近に感じた経験をもつ。

子どもの貧困を感じた場面（問1-1）【回答者数 67 名】

- 「体や髪が清潔に保たれていない」を挙げた人の比率が5割弱と最も高く、次いで「夜間、子どもだけで過ごしている」が4割台半ばで続いている。3位には「体の成長や季節にあった服装をしていない」「食事を抜く・栄養の偏った食事を頻繁にしている」「自宅に勉強できる場所がない・勉強をみってくれる人がいない」の3項目が、いずれも4割で並んでいる。

貧困状態にある子どもの家庭の増減実感（問2）【回答者数 179 名】

- 「わからない」と回答した人の割合が5割強で最も多く、次いで「あまり変わらない」が約2割で続いている。なお、増減を示す「増えている」と「減っている」の2つの選択肢を比較すると、「増えている」が2割弱と、「減っている」（6.7%）を12ポイント差で上回って多い。

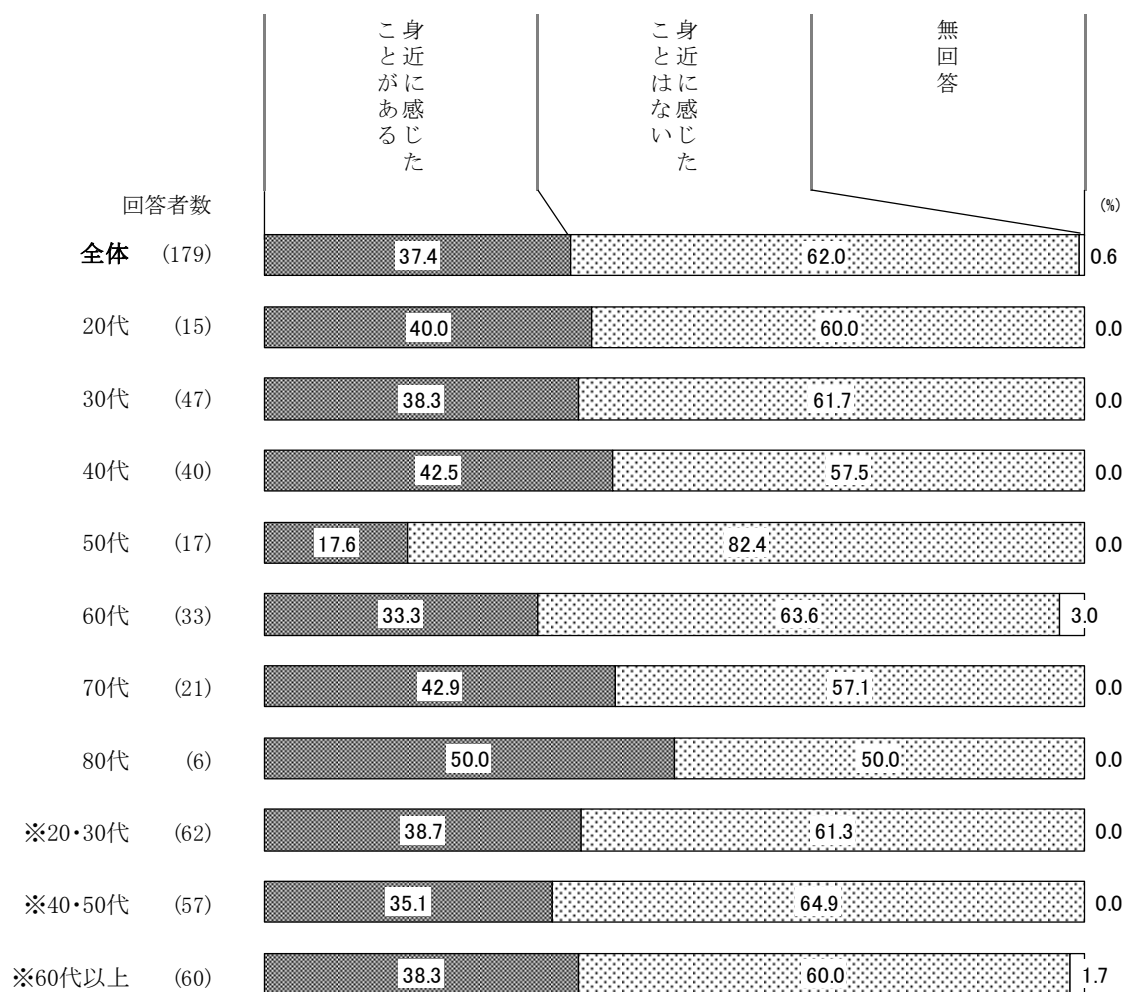
【課題】

- 区民モニターのおおよそ3人に1人以上が子どもの貧困を身近に感じた経験をもつ。子どもの貧困を感じた場面は、「体や髪が清潔に保たれていない」が5割弱で最も高く、次いで「夜間、子どもだけで過ごしている」が4割台半ばで続いている。
- 貧困状態にある子どもの増減については、「わからない」が5割強、「あまり変わらない」が約2割であり、明確に増減を実感していない人が多数派である。なお、「増えている」と「減っている」の比較では、「増えている」と感じる人が2割弱と多く、「減っている」と感じる人を12ポイント差で上回って多くなっている。

1-1 子どもの貧困の実感有無

厚生労働省の調査結果によると、日本の子どもの7人に1人が貧困状態にあると言われています。日本における「子どもの貧困」は、発展途上国の底辺層のような衣食住に事欠く「絶対的貧困」ではなく、経済的困窮により周りにとって当たり前の生活を送ることができない「相対的貧困」のことを指します。相対的貧困の状態にある子どもたちは、教育や体験の機会に乏しく、地域や社会から孤立し、様々な面で不利な状況に置かれてしまう傾向にあります。

問1 あなたは、子どもの貧困について、身近に感じたことはありますか(○は1つだけ)。



※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 子どもの貧困について、身近に感じたことがあるかを聞いたところ、「身近に感じたことはない」(62.0%)が6割強と多いものの、「身近に感じたことがある」(37.4%)も4割弱となっており、おおよそ3人に1人以上が子どもの貧困を身近に感じた経験をもつことが分かる。

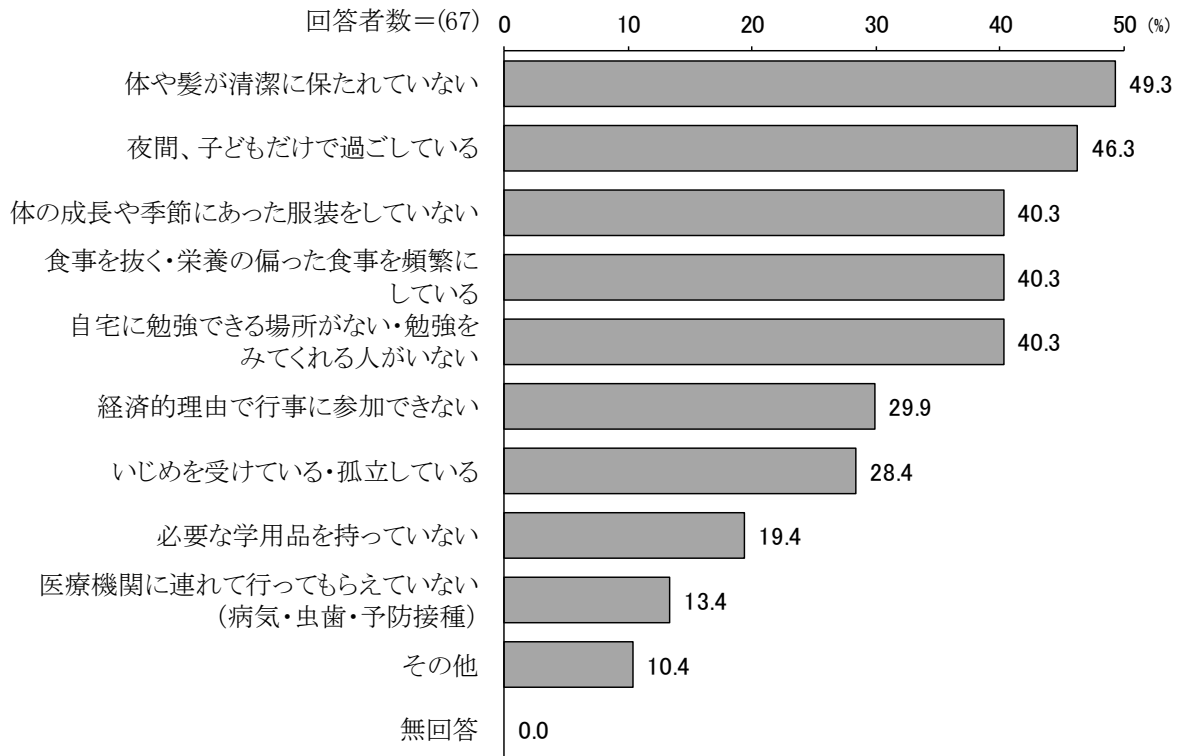
第3章 調査結果の分析及び課題(1 身近にある子どもの貧困について)

- 20代と30代を合わせた若年層、40代と50代を合わせた中年層、60代以上を高年齢層に分けた年齢層別にみても大きな違いはみられないが、サンプル数が少ないことに留意が必要ながら、50代（回答者17名）に限ってみると「身近に感じたことがない」（82.4%）が8割強を占めて高くなっている。

1-2 子どもの貧困を感じた場面

(問1で「1. ある」とお答えの方に)

問1-1 どのような場面で感じましたか(○はあてはまるものすべて)。

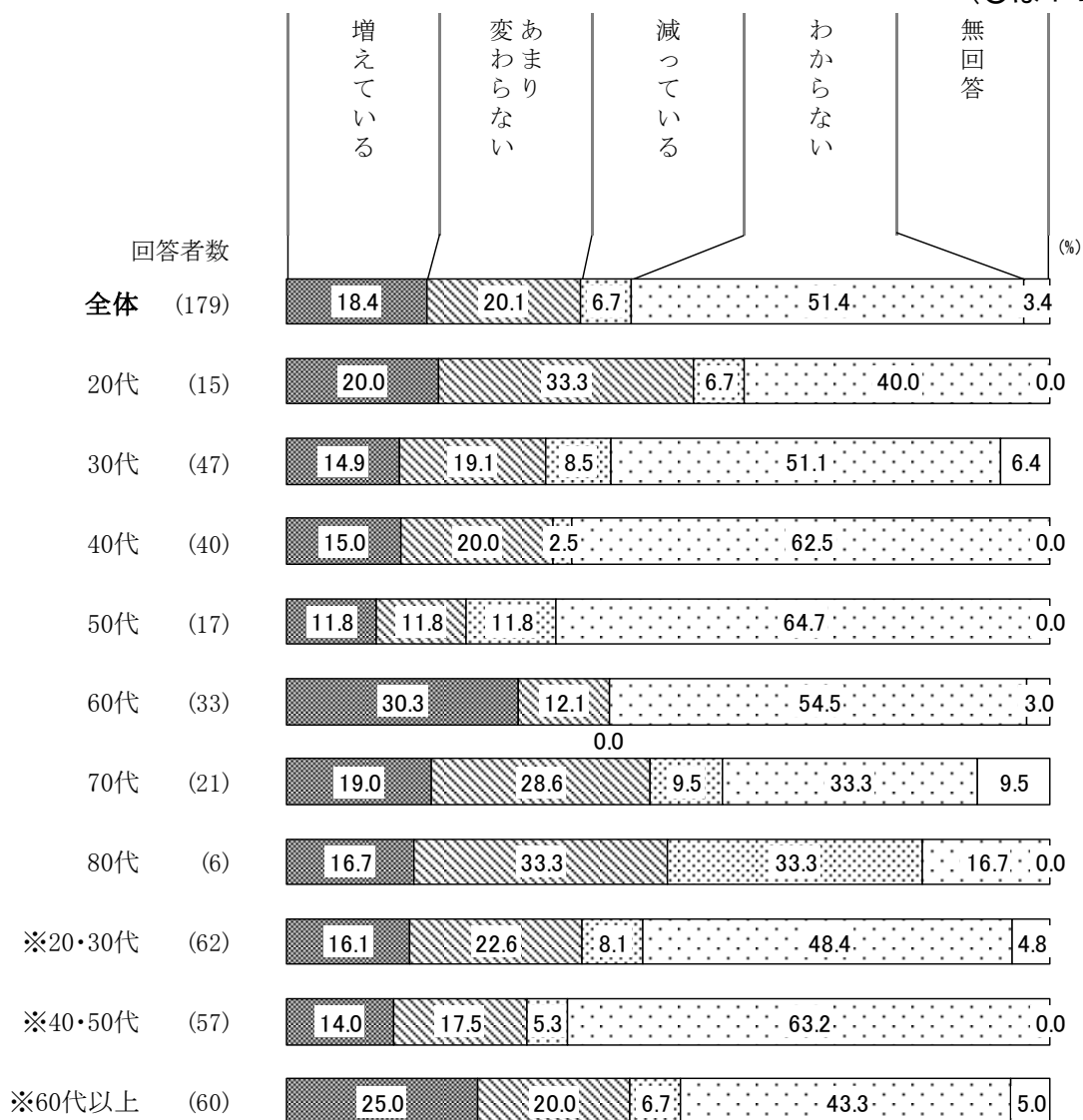


- 子どもの貧困を「身近に感じたことがある」と回答した人に、子どもの貧困を感じた場面を聞いたところ、「体や髪が清潔に保たれていない」(49.3%)が5割弱で最も高く、次いで「夜間、子どもだけで過ごしている」(46.3%)が4割台半ばと僅差で続いている。これらに次いで「体の成長や季節にあった服装をしていない」「食事を抜く・栄養の偏った食事を頻繁にしている」「自宅に勉強できる場所がない・勉強をみてる人がいない」(各40.3%)の3項目が、いずれも約4割で並んで続き上位となっている。

1-3 貧困状態にある子どもの家庭の増減実感

問2 あなたの周りで、貧困状態にある子どもの家庭は増えていると思いますか

(○は1つだけ)。



※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 自分の周りで貧困状態にある子どもの家庭が増えていると思うかを聞いたところ、「わからない」(51.4%)が5割強で最も多く、次いで「あまり変わらない」(20.1%)が約2割で続いている。
- なお、増減を示す「増えている」と「減っている」の2つの選択肢を比較すると、「増えている」(18.4%)が2割弱と、「減っている」の6.7%を12ポイント差で上回って多くなっている。
- 年齢層別にみると、中年層で「わからない」(63.2%)の割合が6割強に達しており、全体に比べて高くなっている。

2 子どもの貧困問題への関心

【現状】

子どもの貧困問題への関心有無（問3）【回答者数 179 名】

- 子どもの貧困問題に「関心がある」と回答した人の割合は、年齢層別3層のいずれにおいても9割前後となっており、ほとんどの人が関心を寄せていることが分かる。

子どもの貧困問題に関心がある主な理由（問3-1）【回答者数 161 名】

- 「社会全体で解決すべき問題だと思うから」が4割強と、2位以下を20ポイント以上引き離して最も多くなっている。2位以下は、「ニュースなどでよく報道されているから」が2割強、「子ども達のために何かしなければと思うから」が1割台半ばで続いている。
- 「身近にある問題だから」（若年層：20.0%＞中年層：11.5%＞高齢層：3.7%）では、年齢が若い層ほど比率が高まる傾向がみられる。

子どもの貧困問題に関心がない主な理由（問3-2）【回答者数 18 名】

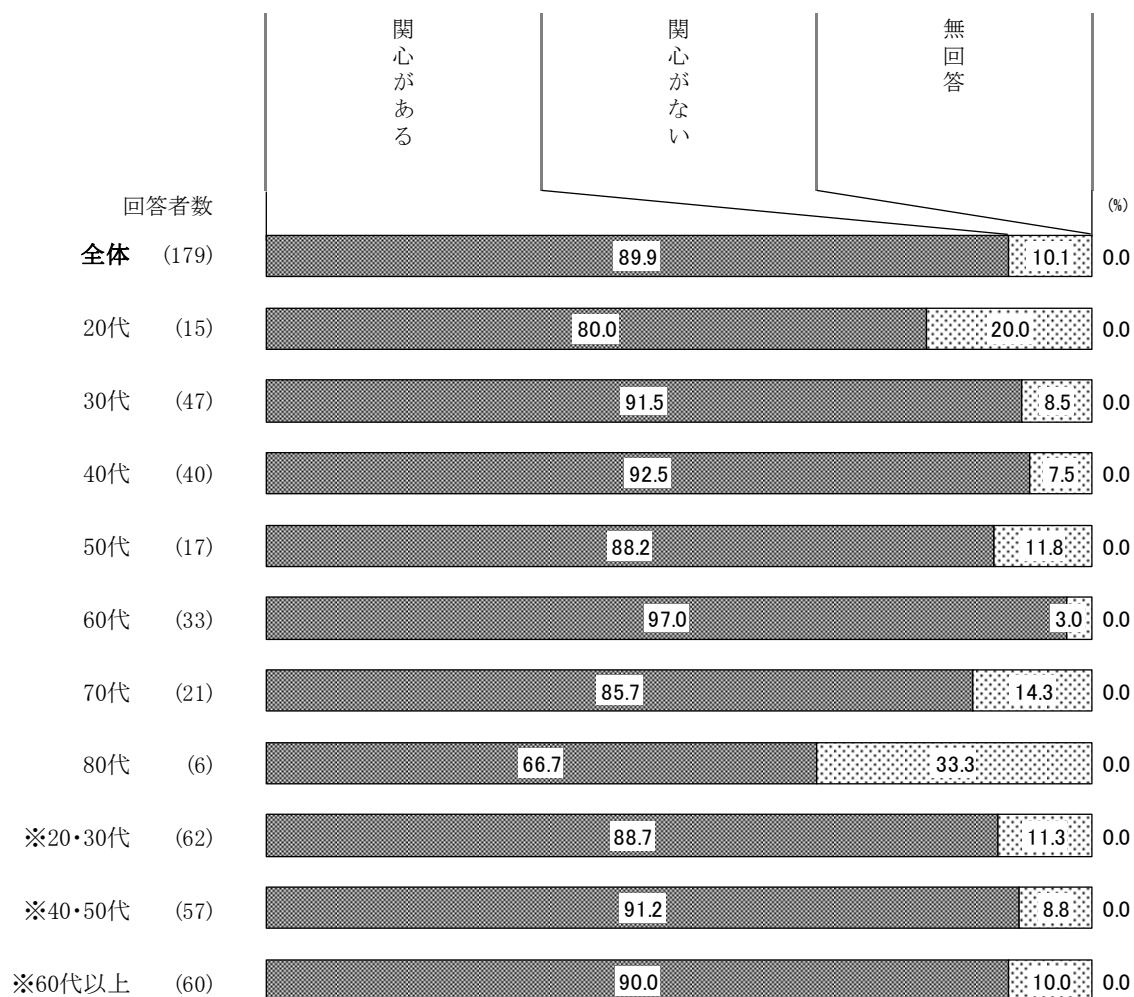
- 「身近な問題ではないから」が4割台半ばを占めて、次点の「家庭の問題だと思うから」を20ポイント以上引き離して最も多くなっている。

【課題】

- 9割の人が子どもの貧困問題に関心があると回答しており、高い関心が寄せられている。関心を寄せている主な理由としては、「社会全体で解決すべき問題だと思うから」が4割強と最も多く、子どもの貧困を社会全体の課題と捉える見方が中心になっている。

2-1 子どもの貧困問題への関心有無

問3 あなたは、子どもの貧困問題に関心はありますか(○は1つだけ)。



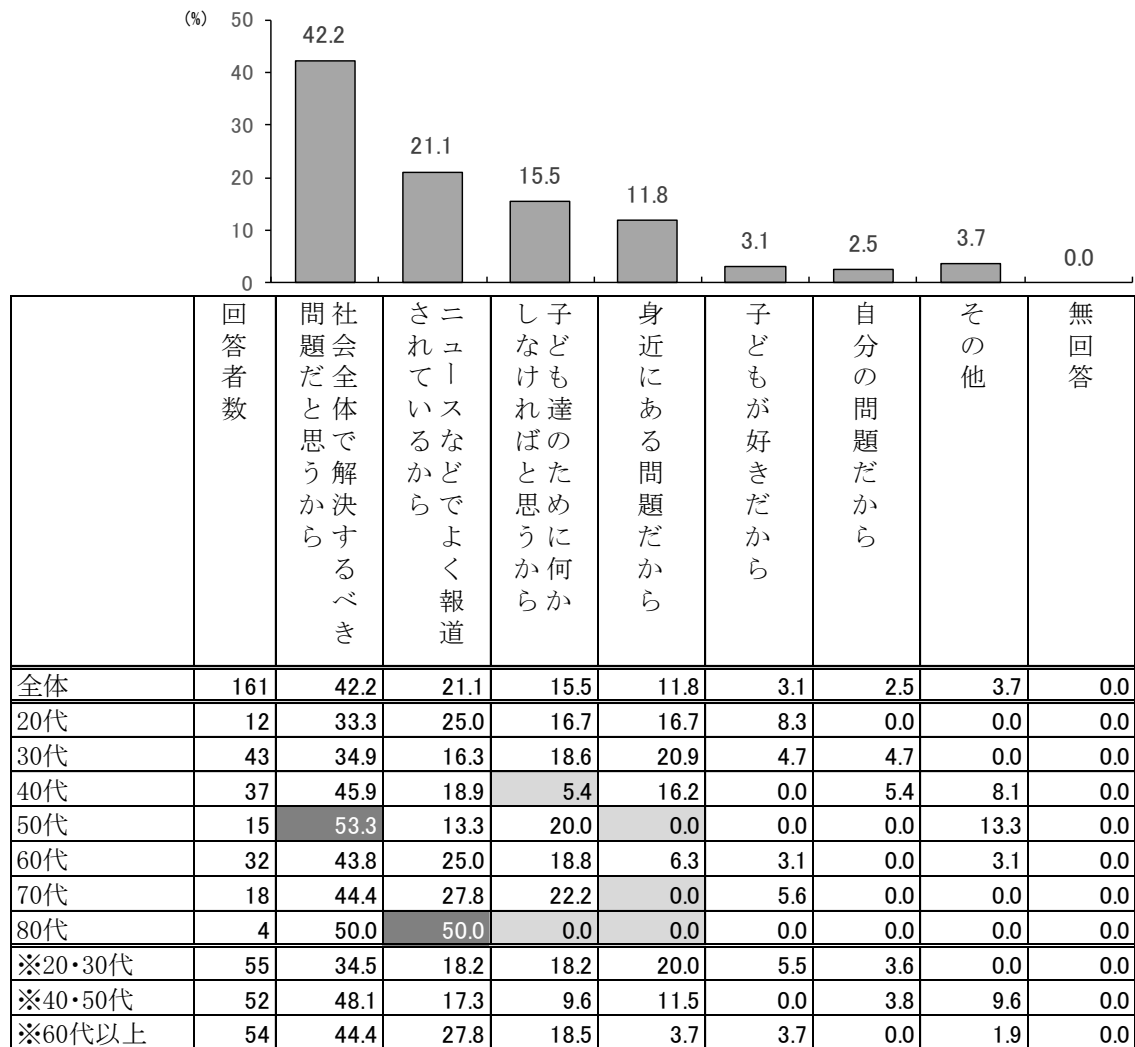
※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 子どもの貧困問題への関心の有無をみると、「関心がある」(89.9%)が約9割と殆どの方が関心を持っていることが分かる。一方、「関心がない」(10.1%)は約1割と少数派である。
- 年齢層別にみても、3年齢層それぞれ「関心がある」が9割前後を占めて、回答の傾向に大きな違いはみられない。

2-2 子どもの貧困問題に関心がある主な理由

(問3で「1. ある」とお答えの方に)

問3-1 関心がある理由は何ですか。一番近いものを選んでください(○は1つだけ)。



■ 全体より+10%

■ 全体より-10%

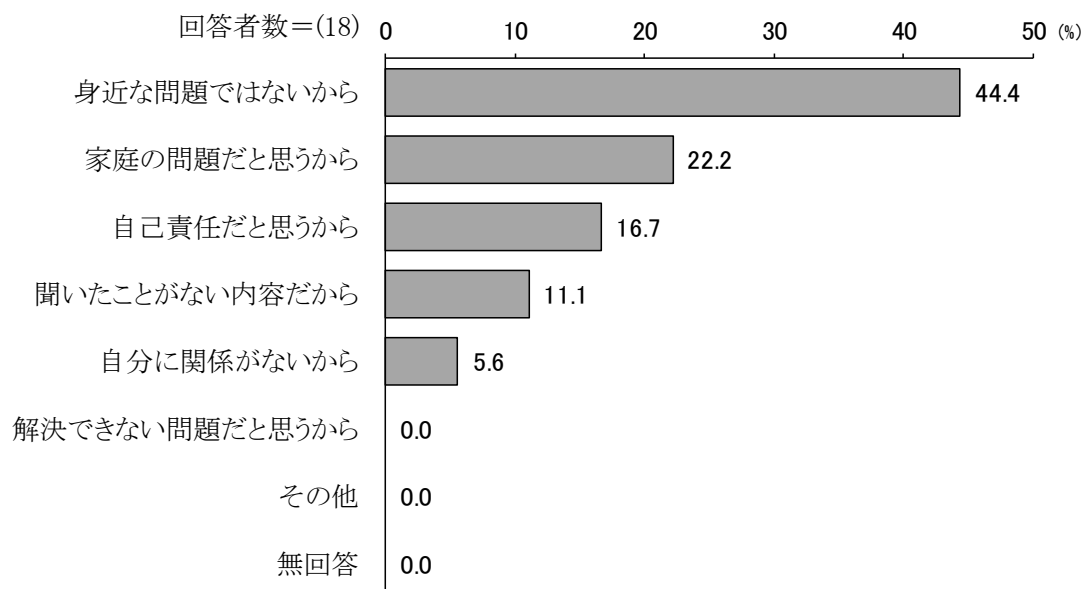
- 子どもの貧困問題に「関心がある」と回答した人に対し、関心がある主な理由（単数回答）を聞いたところ、「社会全体で解決するべき問題だと思うから」（42.2%）が4割強と最も多く、次いで「ニュースなどからよく報道されているから」（21.1%）が2割強と20ポイント以上離れて続いている。以下「子ども達のためにかんがう必要があるから」（15.5%）と「身近にある問題だから」（11.8%）が1割台半ばから1割強で続いている。
- 年齢層別にみて、回答傾向に大きな違いはみられないものの、「身近にある問題だから」では、若年層で20.0%、中年層で11.5%、高齢層で3.7%と、年齢が若い層ほど比率が高まる傾向がみられる。

2-3 子どもの貧困問題に関心がない主な理由

(問3で「2. な い」とお答えの方に)

問3-2 子どもの貧困問題に関心がない理由は何ですか。一番近いものを選んでください

(○は1つだけ)。



- 子どもの貧困問題に「関心がない」と回答した18名に対し、関心がない理由を聞いたところ、「身近な問題ではないから」(44.4%)が4割台半ばで最も多く、以下「家庭の問題だと思うから」(22.2%)と「自己責任だと思うから」(16.7%)がそれぞれ2割前後で続いている。

3 子どもの貧困に対する問題意識

【現状】

子どもの貧困状態の問題認識有無（問4）【回答者数 179 名】

- ほぼ全員が、子どもの貧困を「問題だと思う」（97.8%）と認識している。
- 若年層と中年層では、それぞれ全員が「問題だと思う」（各 100.0%）と回答している。

子どもの貧困がもたらす影響（問5）【回答者数 179 名】

- 「こころの状態が不安定にある」が7割台半ばと最も高く、これに「必要な食事がとれない、または偏った食事によって健康上のリスクが増える」が7割強と僅差で並んで続いて上位2項目となっているが、それ以外の選択肢項目への反応も総じて高い。一方、「影響は出ない」と回答した人は1人もいない。
- 若年層では「必要な食事がとれない、または偏った食事によって健康上のリスクが増える」が8割強と比率が最も高く、高齢層では「いじめや孤立の原因になる」と「不登校や中退の原因になる」がともに8割弱で並んで比率が最も高くなっており、年齢層によって最上位に挙がる項目に違いがみられる。
- また、中年層では「いじめや孤立の原因になる」が5割台半ばと全体に比べて低くなっており、高齢層では「自己肯定感や自尊感情が低くなり、意欲が低下する」と「周りが当たり前に行っていることができない、やったことがない（経験・体験の不足）」で、ともに4割から4割強と全体に比べて低い比率となっている。

子どもの貧困問題が国の経済損失につながることの認知（問6）【回答者数 179 名】

- 認知者の割合が7割弱と多いものの、非認知者も3割強に上る。
- 高齢になるほど、認知者の割合（若年層：61.3%＜中年層：64.9%＜高齢層：73.3%）が高まる傾向がみられる。

子どもの貧困対策の必要性が理解されにくい主な理由（問7）【回答者数 179 名】

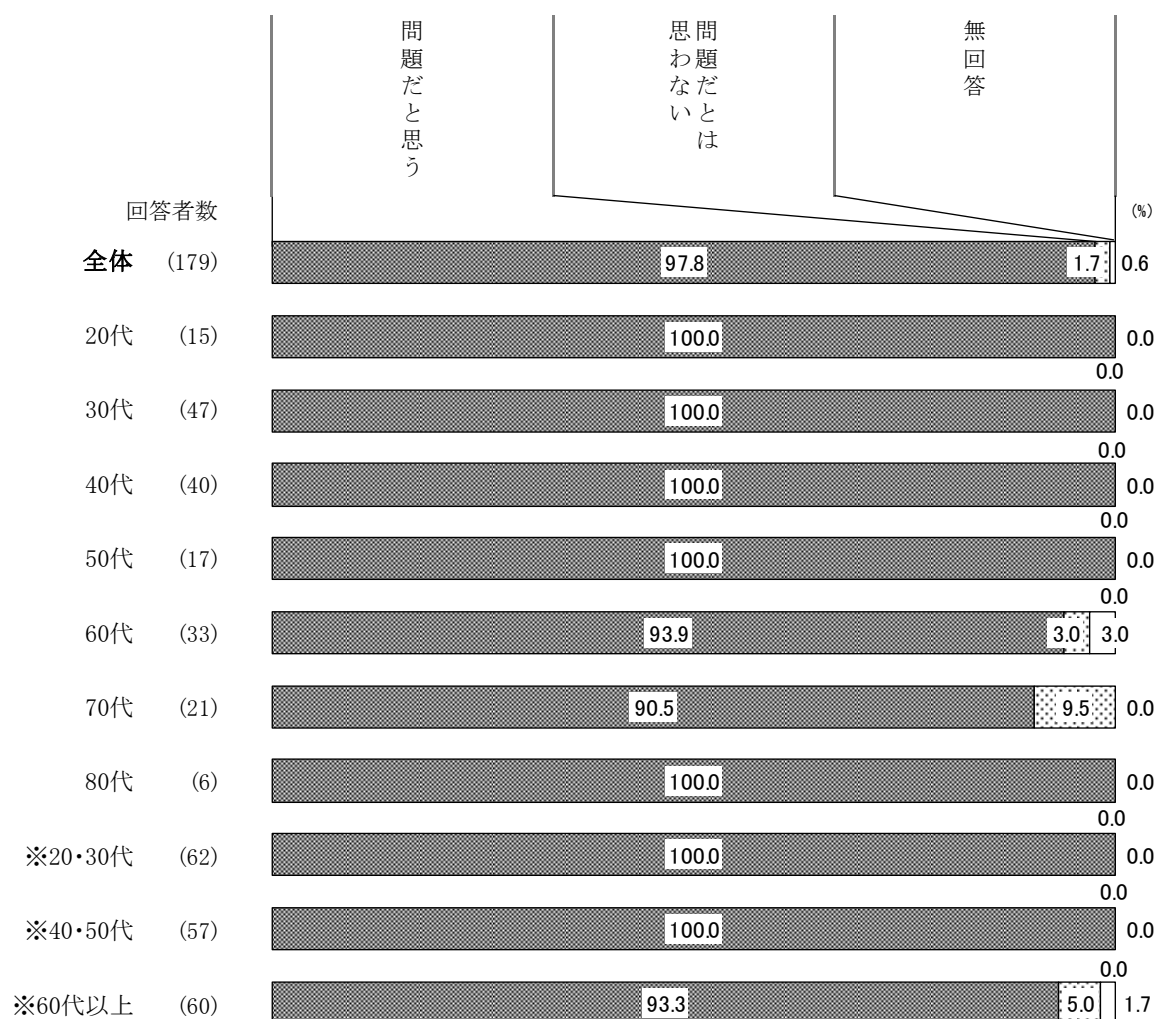
- 「子どもの貧困は家庭の責任だと思う人がいるから」が5割弱を占めて最も多く、次いで「自分には関係ないと思う人がいるから」が2割台半ばと大きく離れて続いている。

【課題】

- ほとんど全員の人が、子どもの貧困を問題であると認識している。
- 子どもの貧困がもたらす影響は、全体でみると「こころの状態が不安定にある」が7割台半ばで最上位であるが、年齢層別にみると若年層では「必要な食事がとれない、または偏った食事によって健康上のリスクが増える」が、高齢層では「いじめや孤立の原因になる」と「不登校や中退の原因になる」がそれぞれ最上位となっており、年齢層によって違いがみられる。
- 子どもの貧困問題が国の経済損失につながることを認知している人の割合は、全体の7割弱を占めており、高齢になるほど認知している人の割合が高まる傾向がみられる。
- 子どもの貧困対策の必要性が理解されにくい主な理由では、「子どもの貧困は家庭の責任だと思う人がいるから」が5割弱を占め最も多く、中心的な意見となっている。

3-1 子どもの貧困状態の問題認識有無

問4 あなたは、子どもが貧困状態にあるのは問題だと思いますか(○は1つだけ)。



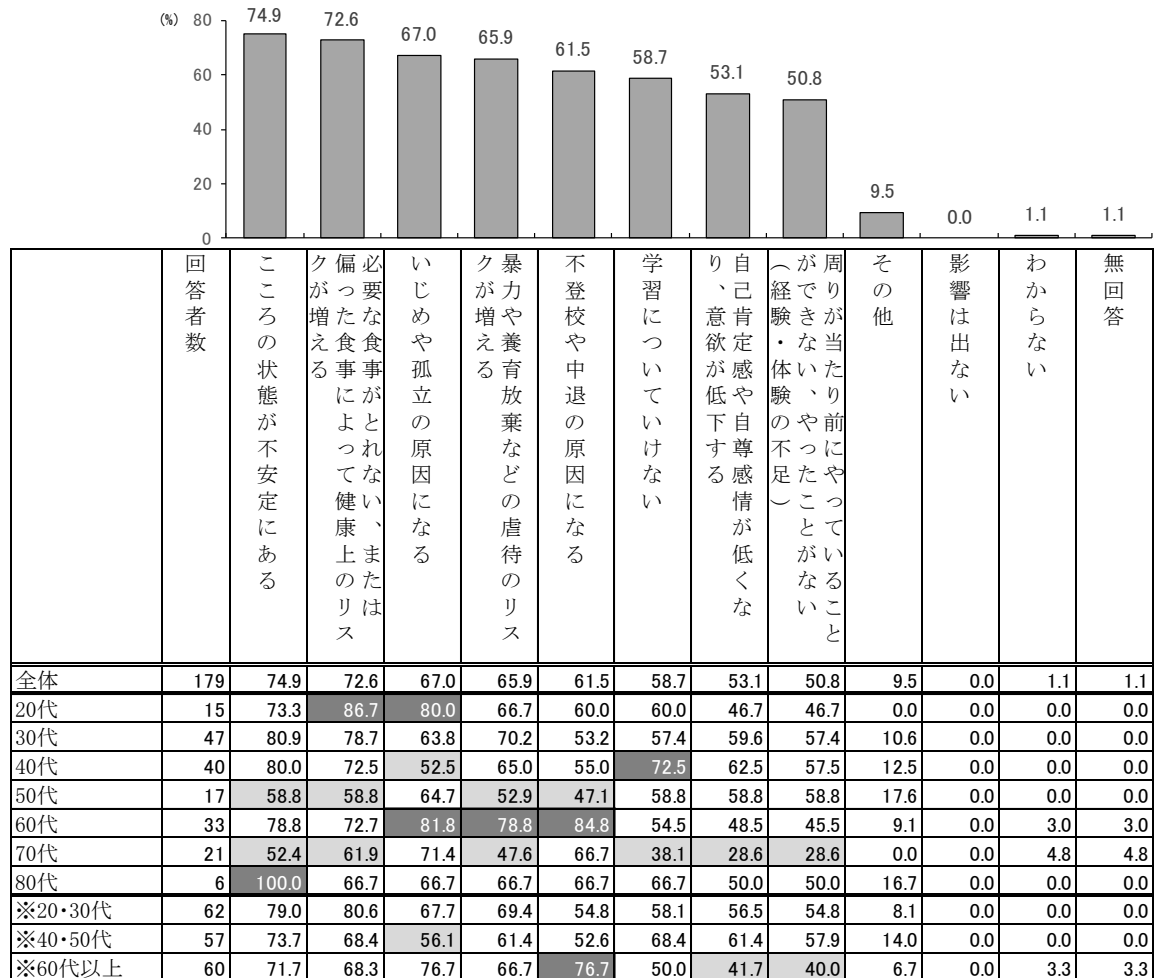
※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 子どもが貧困状態にあるのは問題だと思うかを聴いたところ、ほぼ全員にあたる 97.8%が「問題だと思う」と回答している。
- 年齢層別にみて、回答傾向に大きな違いはみられないものの、若年層と中年層ではそれぞれ全員が「問題だと思う」(各 100.0%)と回答している。

3-2 子どもの貧困がもたらす影響

問5 あなたは、子どもの貧困は、どういうところに影響が出ると思いますか

(○はあてはまるものすべて)。



※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

全体より+10%
全体より-10%

- 子どもの貧困がもたらす影響をみると、「こころの状態が不安定にある」（74.9%）が7割台半ばで最も高く、これに「必要な食事がとれない、または偏った食事によって健康上のリスクが増える」（72.6%）が7割強と僅差で続いている。以下「いじめや孤立の原因になる」（67.0%）と「暴力や養育放棄などの虐待のリスクが増える」（65.9%）がともに7割弱から6割台半ばと上位2項目に僅差で並んで続いている。一方、「影響は出ない」（0.0%）と回答した人は1人もいない。
- 年齢層別にみると、若年層では「必要な食事がとれない、または偏った食事によって健康上のリスクが増える」（80.6%）が8割強と最も高い比率となっている。中年層では「いじめや孤立の原因になる」（56.1%）が全体に比べて低く、逆に「学習についていけない」（68.4%）ではやや高い比率となっている。また、高齢層では「いじめや孤立

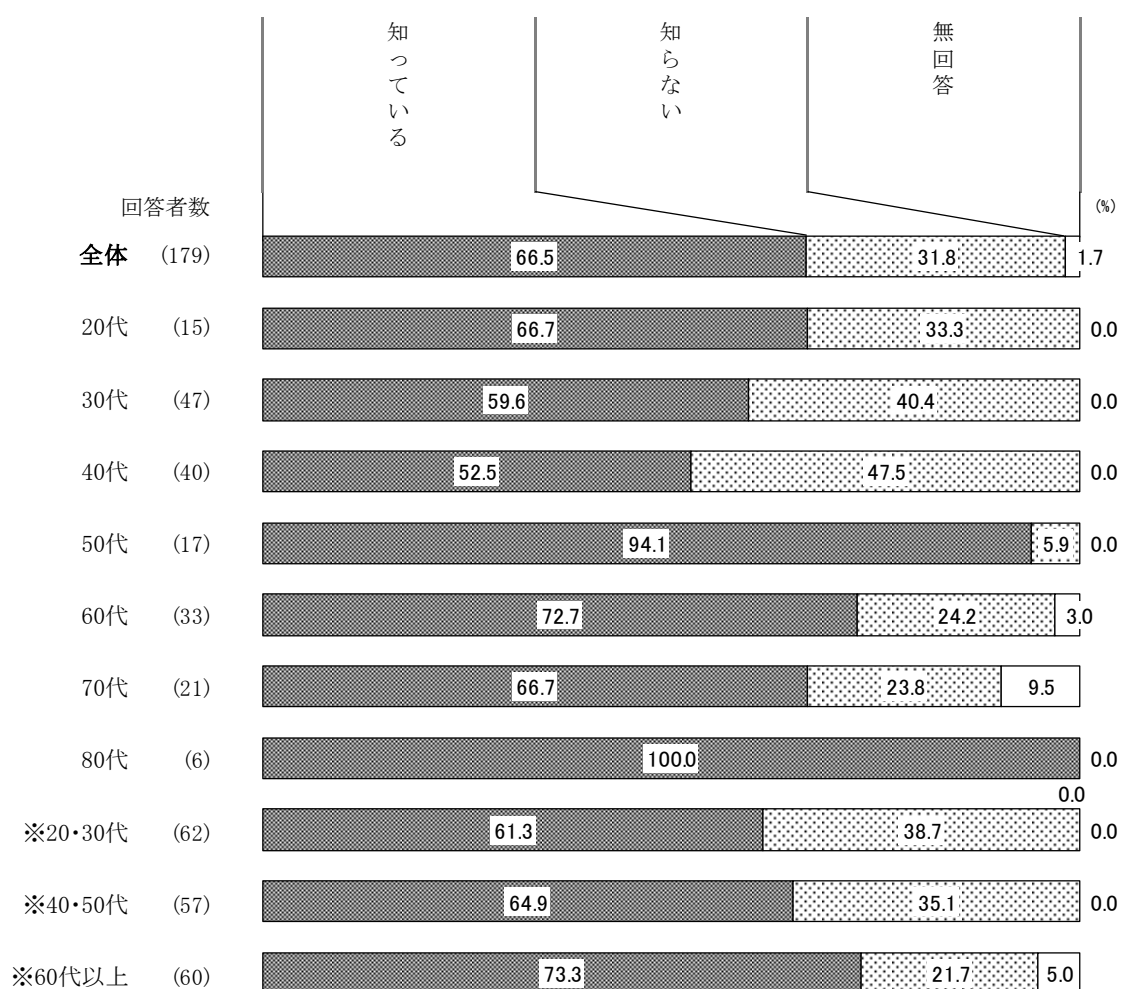
の原因になる」と「不登校や中退の原因になる」（各 76.7%）が8割弱と、ともに最も高い比率になっており、中でも「不登校や中退の原因になる」は全体に比べて15ポイントも高くなっている。加えて、高齢層では「自己肯定感や自尊感情が低くなり、意欲が低下する」（41.7%）と「周りが当たり前にやっていることができない、やったことがない（経験・体験の不足）」（40.0%）がともに全体に比べて低い比率を示すなど、若年層や中年層とはやや異なる回答傾向となっている。

3-3 子どもの貧困問題が国の経済損失につながることの認知

子ども時代の経済的な困窮は、高校中退や高等教育進学へのあきらめを生み、非正規雇用などの低所得につながると言われています。日本財団の推計では、子どもの貧困対策を行わずに教育格差を放置すると、高校中退者や非正規雇用者が増えるため、生涯所得が減少し、ひいては国の経済損失につながるとしています。

問6 あなたは、子どもの貧困問題が国の経済損失につながることを知っていますか

(○は1つだけ)。



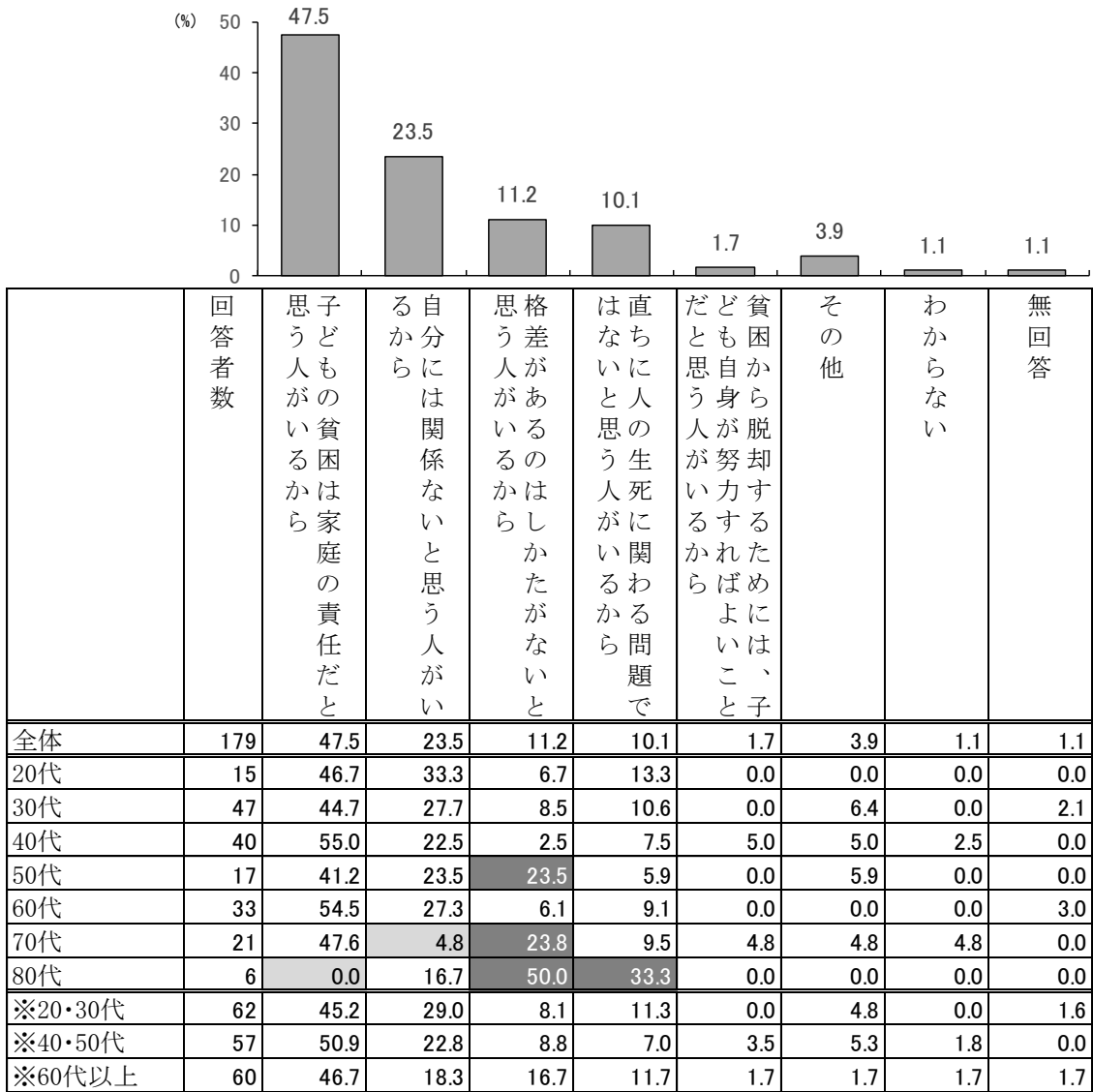
※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 子どもの貧困問題が国の経済損失につながることの認知状況をみると、「知っている」(66.5%) がほぼ3分の2を占めて多くなっているものの、「知らない」(31.8%) も3割を上回っている。
- 年齢層別にみると、「知っている」の割合は、若年層が61.3%、中年層が64.9%、高齢層が73.3%と、高齢になるほど高くなる傾向がみられる。

3-4 子どもの貧困対策の必要性が理解されにくい主な理由

国は平成26年に子どもの貧困対策の推進に関する法律を施行し、子どもの貧困対策に取り組んでいく姿勢を示しました。しかし、それ以前にも貧困状態の子どもは多数存在していたと思われます。

問7 子どもの貧困対策の必要性が理解されにくいのはなぜだと思いますか。一番近いものを選んでください(○は1つだけ)。



※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

全体より+10%
全体より-10%

- 子どもの貧困対策の必要性が理解されにくい主な理由（単数回答）をみると、「子どもの貧困は家庭の責任だと思う人がいるから」（47.5%）が5割弱を占めて最も多く、次点の「自分には関係ないと思う人がいるから」（23.5%）を24ポイント差で引き離している。

- 年齢層別にみると、大きな違いはみられないものの、「自分には関係ないと思う人がいるから」（若年層：29.0%＞中年層：22.8%＞高齢層：18.3%）では、年齢が若い層ほど割合が高くなる傾向がみられる。一方、「格差があるのはしかたないと思う人がいるから」（若年層：8.1%≒中年層：8.8%＜高齢層：16.7%）では、若年層と中年層に比べて、高齢層で割合がやや高くなっている。

4 子ども達のための地域活動について

【現状】

地域の子ども達のための活動への参加有無（問8）【回答者数 179 名】
● 活動していることが「ない」と回答した人の割合は約8割、「ある」と回答した人は約2割となっている。 ● 若年層では、「ある」と回答した人の割合が1割強とやや低くなっている。
活動に参加していない理由（問8－1）【回答者数 144 名】
● 「活動したいが、時間がない」が4割台半ばと最も高く、「活動したいが、活動に関する情報がない」が約4割で続いている。 ● 【※活動意向はあるが、参加していない（計）】は8割弱に達して多く、「活動したいと思わない」は1割台半ばと少数派である。 ● 中年層では「活動したいが、時間がない」が5割台半ばと全体に比べてやや高く、高齢層では「活動したいが、情報がない」が5割と全体に比べてやや高くなっている。
活動したいと思わない理由（問8－1－1）【回答者数 23 名】
● 「時間がない」が4割台半ばを占めて最も高く、中核の理由となっている。
子どもの経験・体験活動を充実させるために重要だと思う取り組み（問9）
【回答者数 179 名】
● 「放課後子ども教室・学童保育室・児童館などでのさまざまな体験活動」（68.7%）が7割弱と最も高く、次いで「学校や家以外での学習支援の場の提供」（65.9%）が6割台半ばの僅差で並んで続いている。以下、2位から21ポイント離れて、3位に「親以外の人との交流の機会提供」（45.3%）が4割台半ば、4位に「スポーツ体験の場の提供」（42.5%）が4割強の順となって続いている。 ● 「親以外の人との交流の機会提供」をみると、若年層では5割台半ばと全体に比べてやや高くなっている一方、中年層では3割台半ばと低くなっており、年齢層によって異なる傾向がみられる。
地域の子ども達のための活動を行う際に必要な情報（問10）【回答者数 179 名】
● 「利用できる場所の情報」（73.7%）と「参加・利用できる団体の情報」（72.1%）が僅差で並んで上位2項目となっている。以下、「行政からの支援（補助金等）の情報」（57.0%）「行政からの情報提供」（49.2%）「活動する地域に関する情報」（47.5%）の順に続いている。 ● 高齢層では「活動する地域に関する情報」（60.0%）「ボランティアの情報」（50.0%）「実績のあるNPO法人等の事例」（45.0%）の3項目で、いずれも全体に比べて比率が高くなっている。

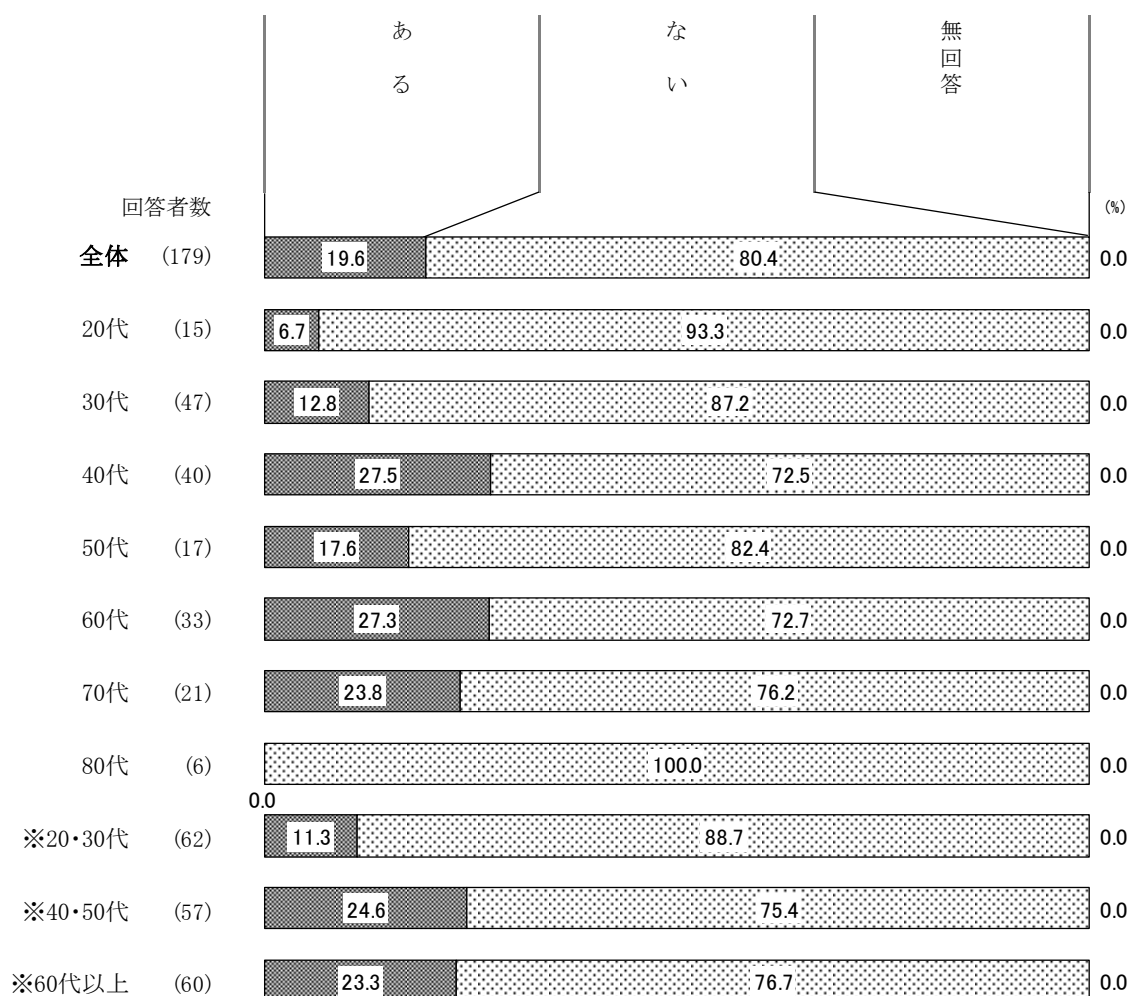
【課題】

- 地域の子ども達のための活動に参加していない人が約8割と多数派である。活動に参加していない理由としては、活動意向はありつつも“時間”がないという意見の比率が4割台半ばと最も高く、次いで、同じく活動意向はありつつも“情報”がないという意見が約4割で続いている。年齢層別にみると、中年層は活動意向がありつつも“時間”がなく、高齢層は“情報”がないといった傾向が窺える。
- 子どもの経験・体験活動を充実させるために重要だと思う取り組みでは、「放課後子ども教室・学童保育室・児童館などでのさまざまな体験活動」と「学校や家以外での学習支援の場の提供」が上位2項目となっている。3位の「親以外の大人との交流の機会提供」をみると、若年層で5割台半ばと比率が高い一方、中年層では3割台半ばと低く、年齢層による違いがみられている。
- 地域の子ども達のための活動を行う際に必要な情報をみると、「利用できる場所の情報」と「参加・利用できる団体の情報」が、ともに7割台前半で上位2項目である。

4-1 地域の子ども達のための活動への参加有無

足立区では、子どもの健康と生活の実態を把握し、家庭環境や生活習慣からどのような影響を受けているかを把握することを目的として、小・中学生の一部を対象に、毎年「子どもの健康・生活実態調査」を行っています。その調査結果から、子どもが地域活動に積極的に参加して経験・体験を積むことで、生活困難な状況でも逆境を乗り越える力が養える可能性が見えてきました。

問8 あなたは、いま、地域の子ども達のために活動していることがありますか(○は1つだけ)。



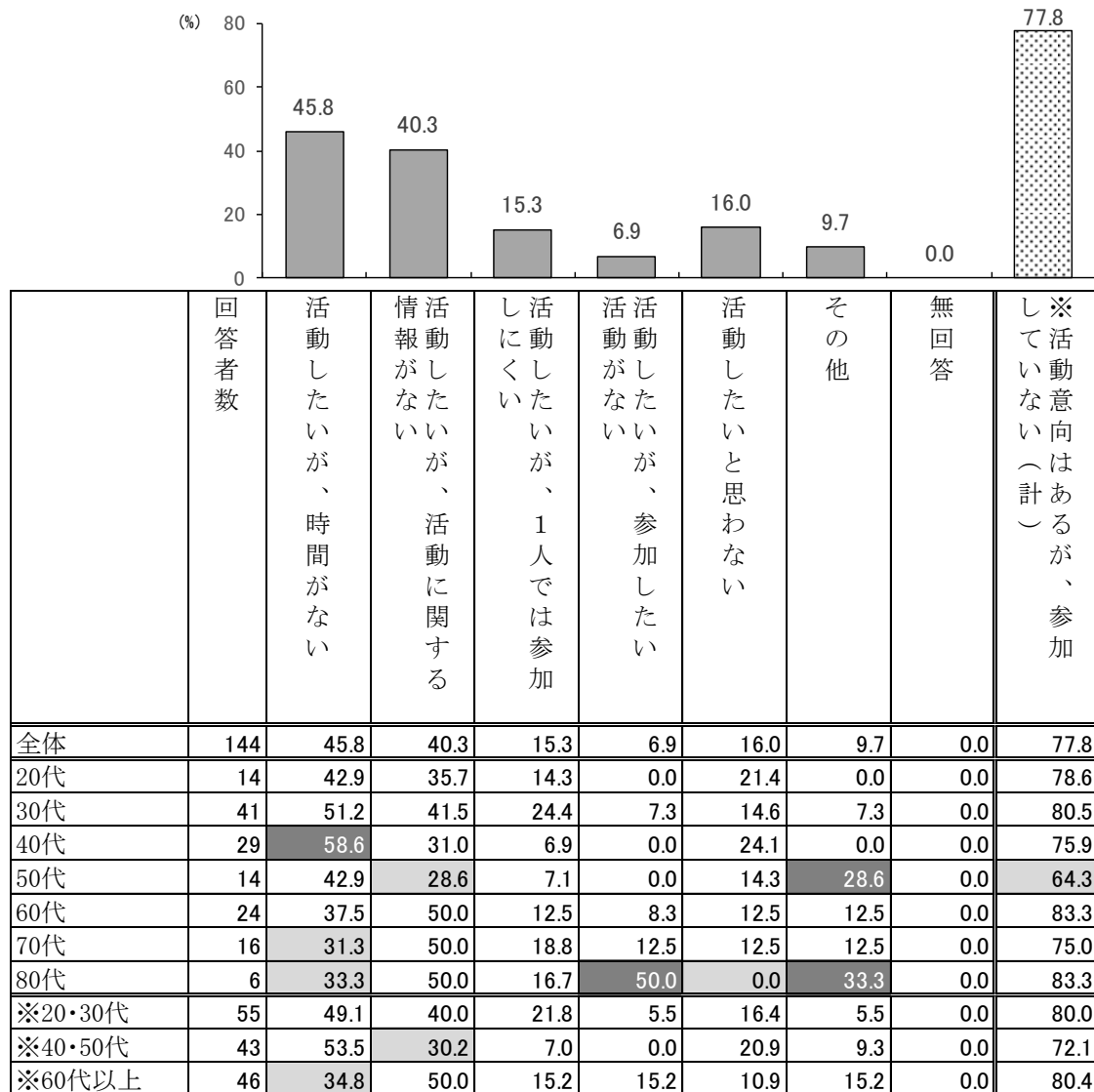
※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 地域の子ども達のための活動への参加有無をみると、「ない」(80.4%)が約8割を占めて多い。一方、「ある」(19.6%)と回答した人の割合は約2割である。
- 年齢層別にみると、大きな違いはみられないものの、「ある」の割合は、若年層では11.3%と1割強であるのに比べて、中年層(24.6%)と高齢層(23.3%)ではともに2割強から2割台半ばと割合が高めとなっている。

4-2 活動に参加していない理由

(問8で「2. ない」とお答えの方に)

問8-1 活動に参加していない理由を教えてください(○はあてはまるものすべて)。



■ 全体より+10%
■ 全体より-10%

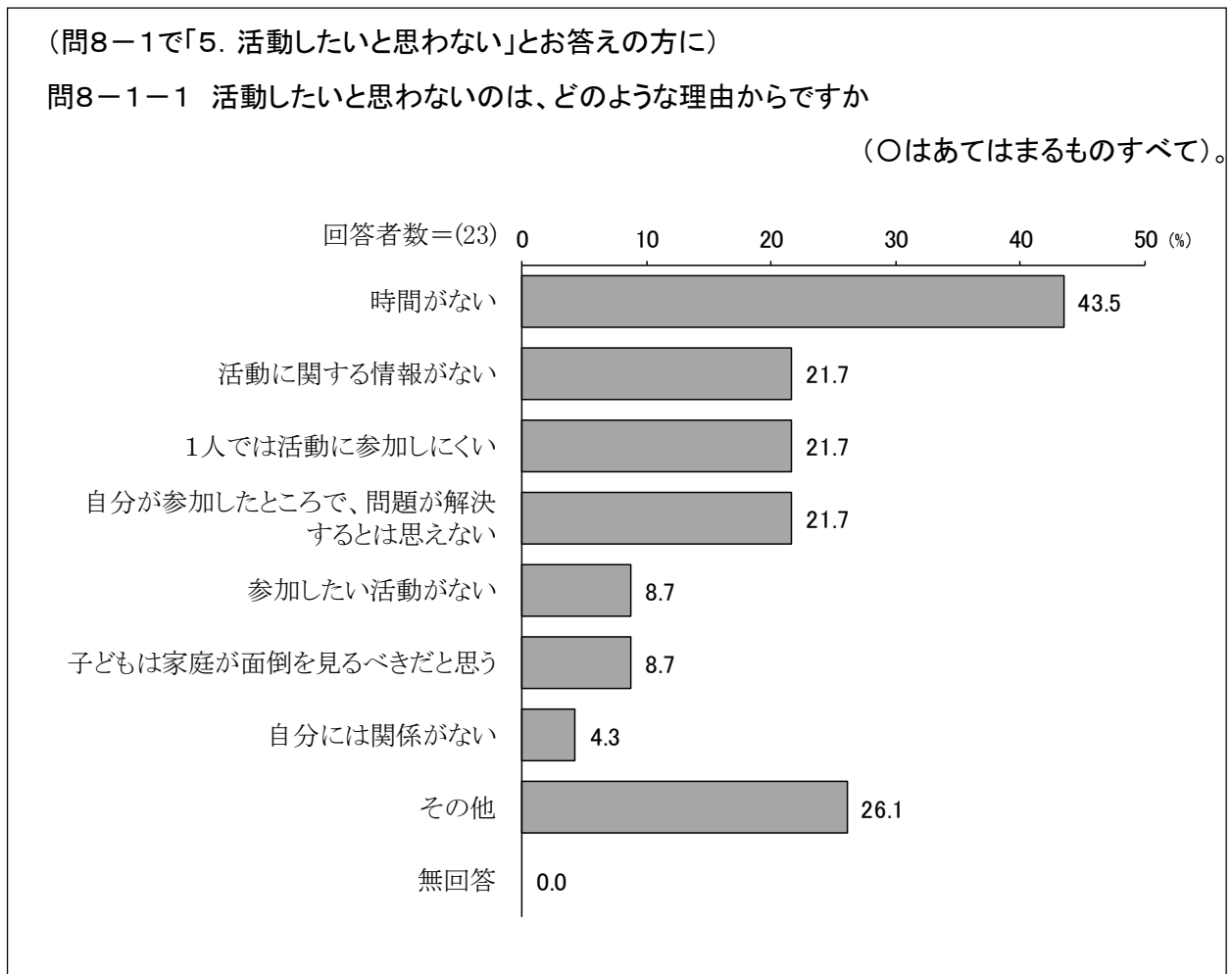
※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 地域の子ども達のための活動への参加有無について、「ない」と回答した人に対し、活動に参加していない理由を聞いたところ、「活動したいが、時間がない」(45.8%)が4割台半ばと最も高く、「活動したいが、活動に関する情報がない」(40.3%)が約4割で続いている。
- なお、これらの2項目に、「活動したいが、1人では参加しにくい」(15.3%)と「活動したいが、参加したい活動がない」(6.9%)を合わせた【※活動意向はあるが、参加して

いない(計)】は77.8%と8割弱に達している。一方、「活動したいと思わない」(16.0%)は1割台半ばと少数派となっている。

- 年齢層別にみると、中年層では「活動したいが、時間がない」(53.5%)が全体に比べてやや高くなっている一方、「活動したいが、活動に関する情報がない」(30.2%)が低くなっている。なお、高齢層では「活動したいが、時間がない」(34.8%)が全体に比べて低くなっている一方、「活動したいが、活動に関する情報がない」(50.0%)がやや高くなっており、上位2項目への反応に中年層と高齢層で違いがみられる結果となっている。

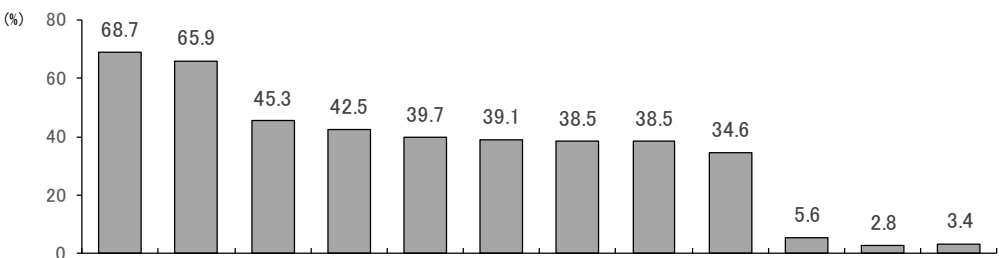
4-3 活動したいと思わない理由



- 地域の子ども達のための活動に参加していない理由において、「活動したいと思わない」と回答した23名に対し、活動したいと思わない理由を聞いたところ、「時間がない」(43.5%)が4割台半ばと最も高く、次いで「活動に関する情報がない」「1人では活動に参加しにくい」「自分が参加したところで、問題が解決するとは思えない」(各21.7%)の3項目が、いずれも2割強で並んで続いている。

4-4 子どもの経験・体験活動を充実させるために重要だと思う取り組み

問9 子どもの経験・体験活動を充実させるために、あなたは、どのような取り組みが重要だと思いますか(○はあてはまるものすべて)。



	回答者数	児童館などでのさまざまな体験活動	学校や家以外での学習支援の場の提供	親以外の大人との交流の機会提供	スポーツ体験の場の提供	中高生が自主的に活動できるような場の提供	町会・自治会の子どもの会活動の活性化や参加を増やす取り組み	地域の企業などと協力したイベント開催	子どもの経験・体験活動の大切さを広めるための啓発活動	料理をする力をつけられるような場の提供	その他	わからない	無回答
全体	179	68.7	65.9	45.3	42.5	39.7	39.1	38.5	38.5	34.6	5.6	2.8	3.4
20代	15	73.3	73.3	46.7	46.7	40.0	33.3	66.7	26.7	46.7	0.0	0.0	6.7
30代	47	63.8	63.8	57.4	46.8	38.3	38.3	42.6	51.1	34.0	4.3	0.0	2.1
40代	40	62.5	55.0	35.0	45.0	35.0	37.5	35.0	27.5	35.0	7.5	7.5	2.5
50代	17	64.7	76.5	35.3	47.1	52.9	17.6	23.5	47.1	47.1	5.9	0.0	0.0
60代	33	81.8	81.8	57.6	30.3	45.5	54.5	33.3	45.5	30.3	12.1	0.0	0.0
70代	21	71.4	57.1	33.3	42.9	38.1	42.9	42.9	19.0	28.6	0.0	4.8	9.5
80代	6	66.7	50.0	16.7	33.3	16.7	33.3	16.7	50.0	16.7	0.0	16.7	16.7
※20・30代	62	66.1	66.1	54.8	46.8	38.7	37.1	48.4	45.2	37.1	3.2	0.0	3.2
※40・50代	57	63.2	61.4	35.1	45.6	40.4	31.6	31.6	33.3	38.6	7.0	5.3	1.8
※60代以上	60	76.7	70.0	45.0	35.0	40.0	48.3	35.0	36.7	28.3	6.7	3.3	5.0

※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

全体より+10%
全体より-10%

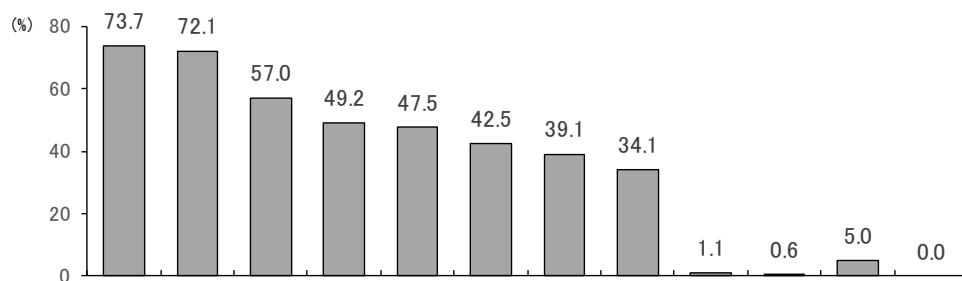
- 子どもの経験・体験活動を充実させるために重要だと思う取り組みを聴いたところ、「放課後子ども教室・学童保育室・児童館などでのさまざまな体験活動」(68.7%)が7割弱と最も高く、次いで「学校や家以外での学習支援の場の提供」(65.9%)が6割台半ばの僅差で並んで続いている。3位以下は、2位から20ポイント以上離れて、「親以外の大人との交流の機会提供」(45.3%)、「スポーツ体験の場の提供」(42.5%)などの7項目が4割台半ばから3割台半ばの中でそれぞれ僅差で並んで続いている。
- 年齢層別にみると、中年層は「親以外の大人との交流の機会提供」(35.1%)で3割台半ばと全体に比べて低くなっている。一方、若年層では「親以外の大人との交流の機会提

供」(54.8%)と「地域の企業などと協力したイベント開催」(48.4%)の2項目で、ともに全体に比べてやや高い比率となっている。なお、高齢層では「町会・自治会の子ども供会活動の活性化や参加者を増やす取り組み」(48.3%)が全体に比べてやや高くなっている。

4-5 地域の子ども達のための活動を行う際に必要な情報

問 10 地域の子ども達のための活動を行う際に、必要な情報はどのようなことだと思いますか

(○はあてはまるものすべて)。



	回答者数	利用できる場所の情報	参加・利用できる団体の情報	行政からの支援(補助金等)の情報	行政からの情報提供	活動する地域に関する情報	すでに取り組んでいる人々の声	ボランティアの情報	実績のあるNPO法人等の事例	その他	特に必要とするものはない	わからない	無回答
全体	179	73.7	72.1	57.0	49.2	47.5	42.5	39.1	34.1	1.1	0.6	5.0	0.0
20代	15	86.7	66.7	46.7	33.3	53.3	33.3	33.3	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0
30代	47	76.6	72.3	59.6	51.1	40.4	48.9	29.8	31.9	2.1	0.0	4.3	0.0
40代	40	70.0	70.0	50.0	42.5	32.5	30.0	35.0	27.5	0.0	0.0	12.5	0.0
50代	17	76.5	76.5	76.5	52.9	52.9	52.9	41.2	29.4	5.9	0.0	0.0	0.0
60代	33	75.8	75.8	57.6	60.6	60.6	48.5	57.6	48.5	0.0	3.0	0.0	0.0
70代	21	66.7	66.7	57.1	47.6	57.1	42.9	42.9	42.9	0.0	0.0	4.8	0.0
80代	6	50.0	83.3	50.0	50.0	66.7	33.3	33.3	33.3	0.0	0.0	16.7	0.0
※20・30代	62	79.0	71.0	56.5	46.8	43.5	45.2	30.6	29.0	1.6	0.0	3.2	0.0
※40・50代	57	71.9	71.9	57.9	45.6	38.6	36.8	36.8	28.1	1.8	0.0	8.8	0.0
※60代以上	60	70.0	73.3	56.7	55.0	60.0	45.0	50.0	45.0	0.0	1.7	3.3	0.0

※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

■ 全体より+10%
■ 全体より-10%

- 地域の子ども達のための活動を行う際に必要な情報をみると、「利用できる場所の情報」(73.7%) が7割台半ばで最も高く、次いで「参加・利用できる団体の情報」(72.1%) が僅差で続き、以下「行政からの支援(補助金等)の情報」(57.0%) 「行政からの情報提供」(49.2%) 「活動する地域に関する情報」(47.5%) の順となっている。一方、「特に必要とするものはない」(0.6%) と回答した人はきわめて少数である。

- 年齢層別にみると、高齢層では「活動する地域に関する情報」(60.0%)「ボランティアの情報」(50.0%)「実績のあるNPO法人等の事例」(45.0%)の3項目で、いずれも全体に比べて比率が高くなっている。

5 区の子どもの貧困対策について

【現状】

区が全庁で子どもの貧困対策に取り組んでいることの認知有無（問 11）【回答者数 179 名】

- 「知っている」という認知者の割合は、2 割強にとどまる。
- 4 割を超える高齢層を筆頭に、高齢になるほど、認知者の割合（若年層：9.7%＜中年層：15.8%＜高齢層：41.7%）が高まる傾向がみられる。

子どもの貧困対策として重要だと思う区の実施（問 12）【回答者数 179 名】

- 「学習支援（補習教室、無料塾、塾代の支援等）」（81.0%）が 8 割強で最も高く、次いで「就学援助・入学準備金・育英資金等の教育資金の支援」（64.2%）と「保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、相談・交流の場の充実」（63.7%）が 6 割台半ばで並んで続き、上位 3 項目となっている。
- 若年層では「学習支援（補習教室、無料塾、塾代の支援等）」（90.3%）が全体に比べてやや高くなっている。中年層では「保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、相談・交流の場の充実」（49.1%）と「地域活動など、子どもとロールモデルになる大人との交流の場の充実」（21.1%）で、ともに全体に比べて比率が低くなっている。また、高齢層では「保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、相談・交流の場の充実」（78.3%）で全体に比べて比率が高くなっている。

子どもの未来を応援する講演会や交流会への参加意向（問 13）【回答者数 179 名】

- 「参加してみたい」と回答した人の割合が 7 割台半ばを占めて多くなっている。その中では、40 代で「参加してみたい」と回答した人の割合が 6 割と少なくなっている。

【課題】

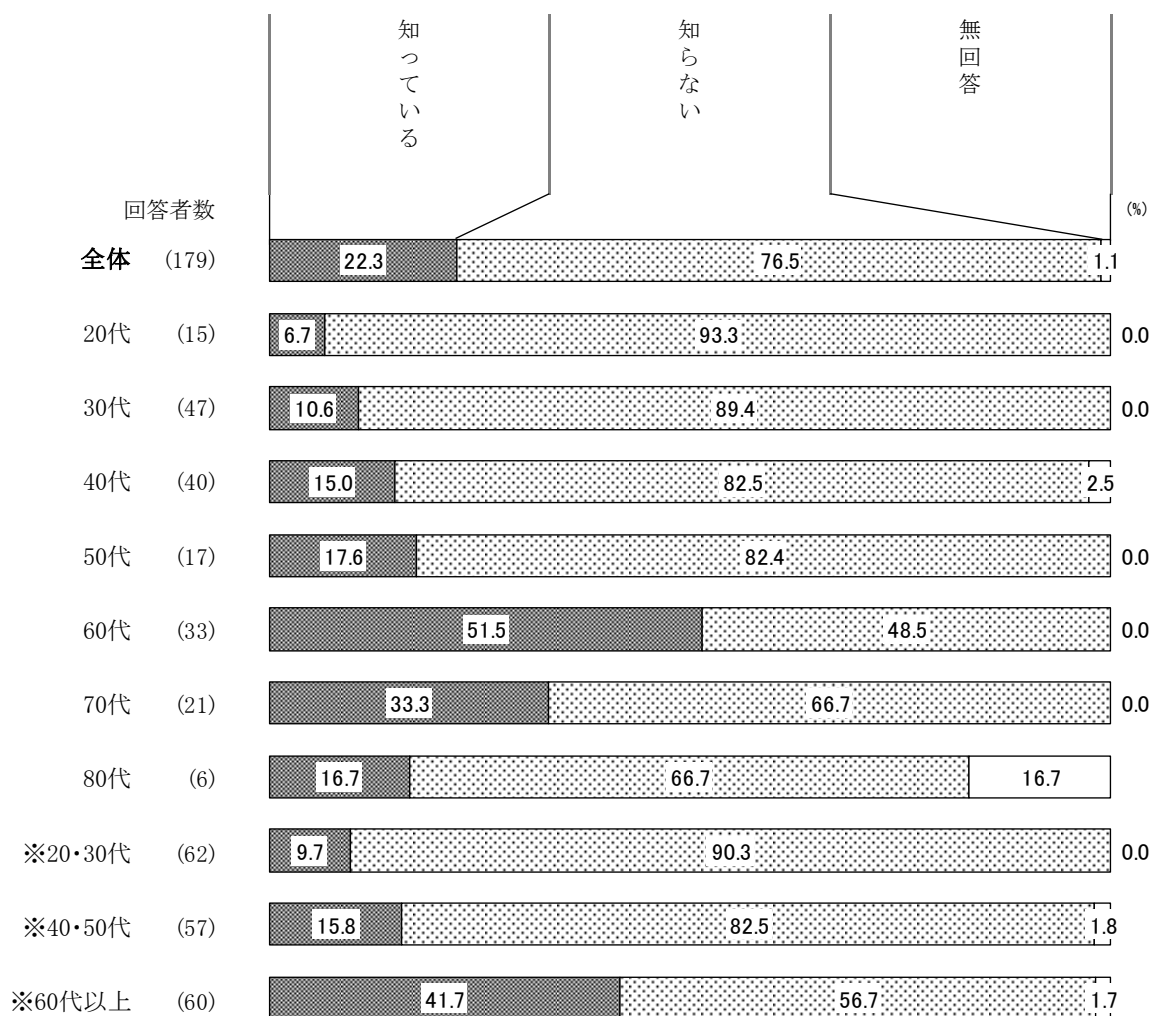
- 区が全庁を挙げて子どもの貧困対策に取り組んでいることを認知している人の割合は、全体では 2 割強にとどまる。認知者の割合は、高齢層では 4 割に達するものの、若年層と中年層では 1 割から 1 割台半ばと低い水準となっている。
- 子どもの貧困対策として重要だと思う区の実施では、8 割強の人が“学習支援”を挙げている。次いで“教育資金の支援”と“子育てに関する相談・交流の場の充実”がともに 6 割台半ばで続き、上位となっている。なお、中年層では“子育てに関する相談・交流の場の充実”と“子どもとロールモデルになる大人との交流の場の充実”を挙げる人の比率が低いほか、多くの項目で比率が低めにとどまる傾向がみられる。
- 子どもの未来を応援する講演会や交流会への参加意向では、参加意向者の割合が全体の 7 割台半ばを占めているものの、40 代では 6 割と少なくなっている。
- 60 代を中核に、すでに高い関心をもつ高齢層のみならず、子どもの貧困がより身近な問題であるはずの中年層が、区の実施に対する関心を高め、理解を深められるように情報を発信していくことが、今後の重要な課題と考える。

5-1 区が全庁で子どもの貧困対策に取り組んでいることの認知有無

区では、すべての子どもたちが生まれ育った環境に左右されることなく、自分の将来に希望を持ち、貧困の連鎖に陥ることなく社会で自立していくことをめざして、全国の先駆けとなる「未来へつなぐ あだちプロジェクト(足立区子どもの貧困対策実施計画)」を平成 27 年度に策定しました。主に貧困の予防や連鎖を断つことに主眼をおいて、全庁を横断した取り組みを進めています。

問 11 あなたは、区が全庁を挙げて、子どもの貧困対策に取り組んでいることを知っていますか

(○は1つだけ)。



※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 区が全庁を挙げて、子どもの貧困対策に取り組んでいることの認知状況をみると、「知らない」(76.5%)が8割弱を占めて多く、「知っている」(22.3%)は2割強となっている。

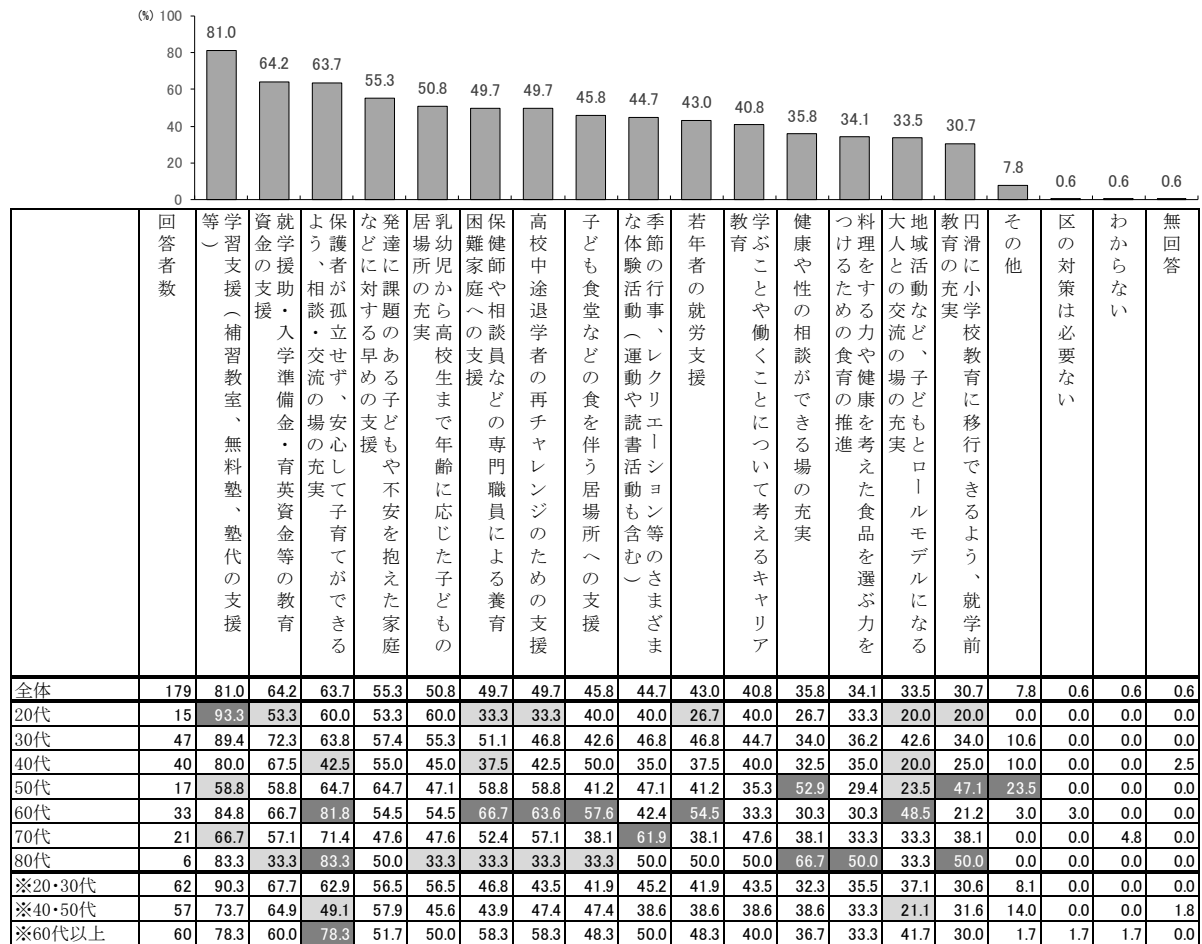
第3章 調査結果の分析及び課題(5 区の子どもの貧困対策について)

- 年齢層別にみると、「知っている」の割合は、若年層で9.7%、中年層で15.8%、高齢層で41.7%と、高齢になるほど高まる傾向がみられ、中でも中年層と高齢層の格差が大きめとなっている。

5-2 子どもの貧困対策として重要だと思う区の実り組み

問 12 子ども貧困対策のため、区としてどのような取り組みが重要だと思いますか

(○はあてはまるものすべて)。



■ 全体より+10%
 ■ 全体より-10%

※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

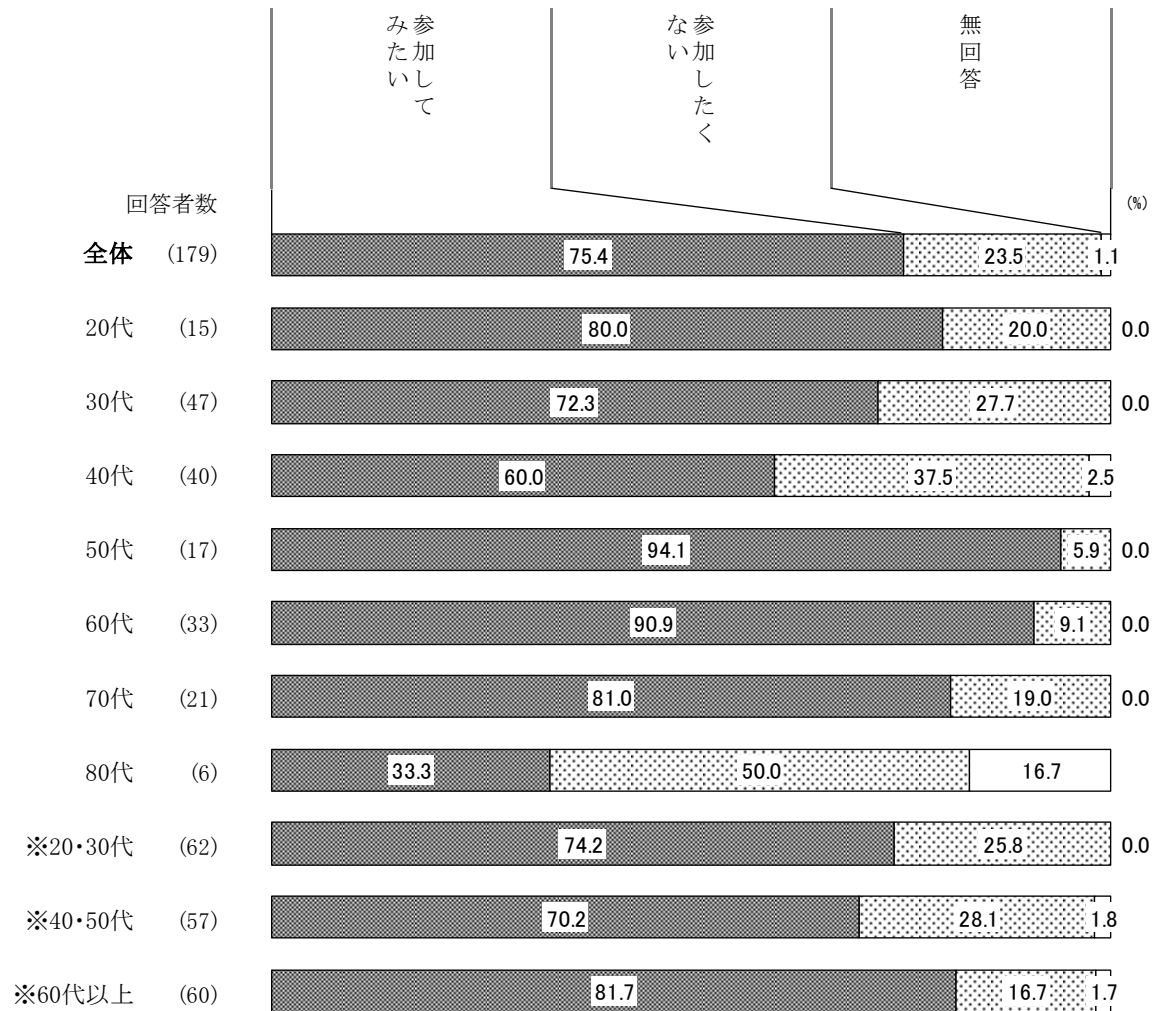
- 子どもの貧困対策として重要だと思う区の実り組みをみると、「学習支援（補習教室、無料塾、塾代の支援等）」（81.0%）が8割強で最も高く、次いで「就学援助・入学準備金・育英資金等の教育資金の支援」（64.2%）と「保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、相談・交流の場の充実」（63.7%）が6割台半ばで並んで続き上位3項目となっている。4位以下は「発達に課題のある子どもや不安を抱えた家庭などに対する早めの支援」（55.3%）が5割台半ば、「乳幼児から高校生まで年齢に応じた子どもの居場所の充実」（50.8%）、「保健師や相談員などの専門職員による養育困難家庭への支援」と「高校中途退学者の再チャレンジのための支援」（各 49.7%）の3項目が、いずれも5割前後の僅差で並んで続いている。

第3章 調査結果の分析及び課題(5 区の子どもの貧困対策について)

- 年齢層別にみると、若年層では「学習支援（補習教室、無料塾、塾代の支援等）」（90.3%）が全体に比べてやや高くなっている。中年層では「保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、相談・交流の場の充実」（49.1%）と「地域活動など、子どもとロールモデルになる大人との交流の場の充実」（21.1%）の2項目で、ともに全体に比べて比率が低くなっている。また、高齢層では「保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、相談・交流の場の充実」（78.3%）で全体に比べて比率が高くなっている。

5-3 子どもの未来を応援する講演会や交流会への参加意向

問 13 区では、子どもの貧困対策を考える機会や活動する人を増やすために、定期的に講演会や交流会を開催しています。あなたは、子どもの未来を応援する講演会や交流会に参加してみたいと思いますか(○は1つだけ)。

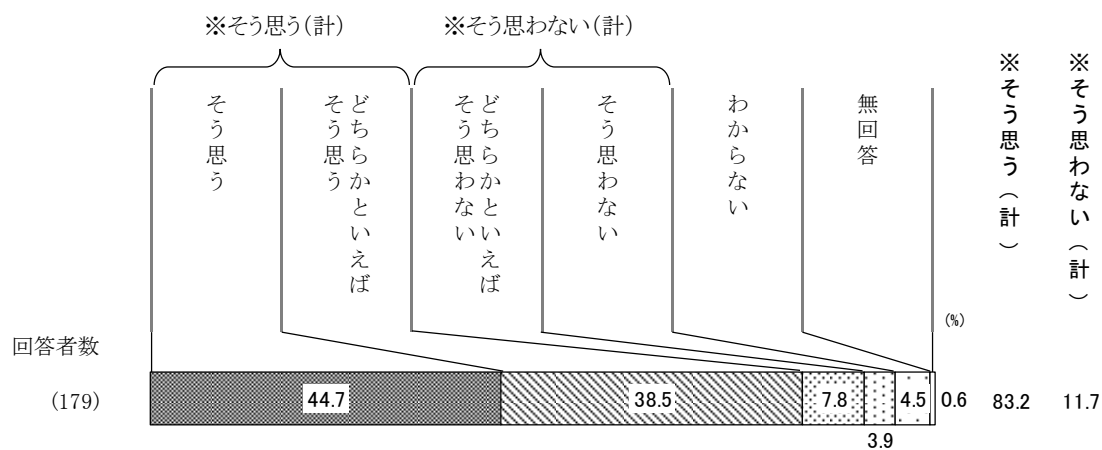


※サンプル数 30 未満は参考値として掲載。

- 子どもの未来を応援する講演会や交流会への参加意向をみると、「参加してみたい」(75.4%)が7割台半ばを占めて多く、「参加したくない」(23.5%)は2割台半ばである。
- 年齢層別にみると、大きな違いはみられないものの、高齢層では「参加してみたい」(81.7%)がやや高くなっている。
- また、年代別にみると、40代で「参加してみたい」(60.0%)の割合が6割と全体に比べて少なくなっている。

● アンケートの有効度

問 14 あなたは、今回の調査を実施することで、区民のニーズや意識を把握することができ、区政の改善につながると感じますか(○は1つだけ)。



「そう思う」(44.7%)と「どちらかといえばそう思う」(38.5%)を合わせた【そう思う(計)】は83.2%と8割強に達している。

第4章 調査票

● 使用した調査票

※調査票内の集計母数について

特にサンプル数表記のない設問は、全数ベース（回答者数 179）で集計しており、母数の記載を割愛した。

一部の該当設問については、設問ごとに回答者数を表記した。

モニター番号 _____ 番

（必ず記入してください）

平成30年度 第3回 区政モニターアンケート

《 子どもの貧困対策について 》

足立区では、「次代の担い手である子どもたちが「生き抜く力」を身につけ、自分の人生を自ら切り開き、貧困の連鎖に陥ることなく社会で自立していくこと」を基本理念のひとつとして、平成27年度に「未来へつなぐ あだちプロジェクト（足立区子どもの貧困対策実施計画）」を策定し、全庁を挙げて子どもの貧困対策に取り組んでいます。

プロジェクトを進める中で、子どもが地域活動に積極的に参加して経験・体験を積むことで、生活困難な状況でも逆境を乗り越える力が養える可能性が見えてきました。

今回のアンケートでは、「子どもの貧困に対する関心」や「子どもの経験・体験活動を充実させるための取り組み」などについて、区民の皆さまのご意見をお伺いしたいと思います。

ぜひ、アンケートにご協力をお願いいたします。

担当所属：子どもの貧困対策担当課

厚生労働省の調査結果によると、日本の子どもの7人に1人が貧困状態にあると言われています。日本における「子どもの貧困」は、発展途上国の底辺層のような衣食住に事欠く「絶対的貧困」ではなく、経済的困窮により周りにとって当たり前の生活を送ることができない「相対的貧困」のことを指します。相対的貧困の状態にある子どもたちは、教育や体験の機会に乏しく、地域や社会から孤立し、様々な面で不利な状況に置かれてしまう傾向にあります。

問1 あなたは、子どもの貧困について、身近に感じたことはありますか（〇は1つだけ）。

1. ある

37.4%

2. ない ⇒ 問2へお進みください 62.0%

（問1で「1. ある」とお答えの方に）

問1-1 どのような場面で感じましたか（〇はあてはまるものすべて）。

回答者数 67

- | | |
|-----------------------------------|-------|
| 1. 体の成長や季節にあった服装をしていない | 40.3% |
| 2. 体や髪が清潔に保たれていない | 49.3 |
| 3. 食事を抜く・栄養の偏った食事を頻繁にしている | 40.3 |
| 4. 必要な学用品を持っていない | 19.4 |
| 5. 自宅に勉強できる場所がない・勉強をみてる人がいない | 40.3 |
| 6. 経済的理由で行事に参加できない | 29.9 |
| 7. いじめを受けている・孤立している | 28.4 |
| 8. 医療機関に連れて行ってもらえていない（病気・虫歯・予防接種） | 13.4 |
| 9. 夜間、子どもだけで過ごしている | 46.3 |
| 10. その他（ ） | 10.4 |

問2 あなたの周りで、貧困状態にある子どもの家庭は増えていると思いますか（〇は1つだけ）。

- | | |
|-------------|-------|
| 1. 増えている | 18.4% |
| 2. あまり変わらない | 20.1 |
| 3. 減っている | 6.7 |
| 4. わからない | 51.4 |

問3 あなたは、子どもの貧困問題に関心はありますか（○は1つだけ）。

1. あ る	89.9%	2. な い	10.1%	⇒ 問3-2へお進みください
--------	-------	--------	-------	----------------

（問3で「1. あ る」とお答えの方に）

問3-1 関心がある理由は何ですか。一番近いものを選んでください（○は1つだけ）。

回答者数 161

1. 自分の問題だから	2.5%
2. 身近にある問題だから	11.8
3. ニュースなどでよく報道されているから	21.1
4. 子どもが好きだから	3.1
5. 子ども達のために何かしなければと思うから	15.5
6. 社会全体で解決すべき問題だと思うから	42.2
7. その他（ ）	3.7

（問3で「2. な い」とお答えの方に）

問3-2 子どもの貧困問題に関心がない理由は何ですか。一番近いものを選んでください（○は1つだけ）。

回答者数 18

1. 自分に関係がないから	5.6%
2. 身近な問題ではないから	44.4
3. 聞いたことがない内容だから	11.1
4. 家庭の問題だと思うから	22.2
5. 自己責任だと思うから	16.7
6. 解決できない問題だと思うから	-
7. その他（ ）	-

問4 あなたは、子どもが貧困状態にあるのは問題だと思いますか（〇は1つだけ）。

1. 思 う	97.8%	2. 思わない	1.7%
--------	-------	---------	------

問5 あなたは、子どもの貧困は、どういうところに影響が出ると思いますか

（〇はあてはまるものすべて）。

1. 必要な食事がとれない、または偏った食事によって健康上のリスクが増える	72.6%
2. 学習についていけない	58.7
3. 不登校や中退の原因になる	61.5
4. 暴力や養育放棄などの虐待のリスクが増える	65.9
5. 自己肯定感や自尊感情が低くなり、意欲が低下する	53.1
6. こころの状態が不安定にある	74.9
7. 周りが当たり前に行っていることができない、やったことがない （経験・体験の不足）	50.8
8. いじめや孤立の原因になる	67.0
9. その他（ ）	9.5
10. 影響は出ない	-
11. わからない	1.1

子ども時代の経済的な困窮は、高校中退や高等教育進学へのあきらめを生み、非正規雇用などの低所得につながると言われています。日本財団の推計では、子どもの貧困対策を行わずに教育格差を放置すると、高校中退者や非正規雇用者が増えるため、生涯所得が減少し、ひいては国の経済損失につながるとしています。

問6 あなたは、子どもの貧困問題が国の経済損失につながることを知っていますか
(○は1つだけ)。

1. 知っている	66.5%	2. 知らない	31.8%
----------	-------	---------	-------

国は平成26年に子どもの貧困対策の推進に関する法律を施行し、子どもの貧困対策に取り組んでいく姿勢を示しました。しかし、それ以前にも貧困状態の子どもは多数存在していたと思われます。

問7 子どもへの貧困対策の必要性が理解されにくいのはなぜだと思いますか。一番近いものを選んでください(○は1つだけ)。

1. 直ちに人の生死に関わる問題ではないと思う人がいるから	10.1%
2. 子どもの貧困は家庭の責任だと思う人がいるから	47.5
3. 貧困から脱却するためには、子ども自身が努力すればよいことだと思う人がいるから	1.7
4. 格差があるのはしかたがないと思う人がいるから	11.2
5. 自分には関係ないと思う人がいるから	23.5
6. その他()	3.9
7. わからない	1.1

足立区では、子どもの健康と生活の実態を把握し、家庭環境や生活習慣からどのような影響を受けているかを把握することを目的として、小・中学生の一部を対象に、毎年「子どもの健康・生活実態調査」を行っています。その調査結果から、子どもが地域活動に積極的に参加して経験・体験を積むことで、生活困難な状況でも逆境を乗り越える力が養える可能性が見えてきました。

問8 あなたは、いま、地域の子ども達のために活動していることがありますか(○は1つだけ)。

1. ある 19.6% ⇒問9へお進みください 2. ない 80.4%

(問8で「2. ない」とお答えの方に)

問8-1 活動に参加していない理由を教えてください(○はあてはまるものすべて)。
回答者数 144

1. 活動したいが、参加したい活動がない	6.9%
2. 活動したいが、時間がない	45.8
3. 活動したいが、活動に関する情報がない	40.3
4. 活動したいが、1人では参加しにくい	15.3
5. 活動したいと思わない	16.0
6. その他()	9.7

(問8-1で「5. 活動したいと思わない」とお答えの方に)

問8-1-1 活動したいと思わないのは、どのような理由からですか
(○はあてはまるものすべて)。
回答者数 23

1. 参加したい活動がない	8.7%
2. 時間がない	43.5
3. 活動に関する情報がない	21.7
4. 1人では活動に参加しにくい	21.7
5. 子どもは家庭が面倒を見るべきだと思う	8.7
6. 自分が参加したところで、問題が解決するとは思えない	21.7
7. 自分には関係がない	4.3
8. その他()	26.1

第4章 使用した調査票

問9 子どもの経験・体験活動を充実させるために、あなたは、どのような取り組みが重要だと思いますか（〇はあてはまるものすべて）。

1. 放課後子ども教室・学童保育室・児童館などでのさまざまな体験活動	68.7%
2. 中高生が自主的に活動できるような場の提供	39.7
3. スポーツ体験の場の提供	42.5
4. 料理をする力をつけられるような場の提供	34.6
5. 町会・自治会の子ども会活動の活性化や参加者を増やす取り組み	39.1
6. 学校や家以外での学習支援の場の提供	65.9
7. 親以外の大人との交流の機会提供	45.3
8. 地域の企業などと協力したイベント開催	38.5
9. 子どもの経験・体験活動の大切さを広めるための啓発活動	38.5
10. その他（ ）	5.6
11. わからない	2.8

問10 地域の子供達のための活動を行う際に、必要な情報はどのようなことだと思いますか（〇はあてはまるものすべて）。

1. 参加・利用できる団体の情報	72.1%
2. 利用できる場所の情報	73.7
3. すでに取り組んでいる人々の声	42.5
4. 活動する地域に関する情報	47.5
5. ボランティアの情報	39.1
6. 行政からの支援（補助金等）の情報	57.0
7. 行政からの情報提供	49.2
8. 実績のあるNPO法人等の事例	34.1
9. その他（ ）	1.1
10. 特に必要とするものはない	0.6
11. わからない	5.0

区では、すべての子どもたちが生まれ育った環境に左右されることなく、自分の将来に希望を持ち、貧困の連鎖に陥ることなく社会で自立していくことをめざして、全国の実先駆けとなる「未来へつなぐ あだちプロジェクト（足立区子どもの貧困対策実施計画）」を平成27年度に策定しました。主に貧困の予防や連鎖を断つことに主眼をおいて、全庁を横断した取り組みを進めています。

問11 あなたは、区が全庁を挙げて、子どもの貧困対策に取り組んでいることを知っていますか（○は1つだけ）。

1. 知っている	22.3%	2. 知らない	76.5%
----------	-------	---------	-------

問12 子どもの貧困対策のため、区としてどのような取り組みが重要だと思いますか（○はあてはまるものすべて）。

1. 学習支援（補習教室、無料塾、塾代の支援等）	81.0%
2. 就学援助・入学準備金・育英資金等の教育資金の支援	64.2
3. 季節の行事、レクリエーション等のさまざまな体験活動 （運動や読書活動も含む）	44.7
4. 地域活動など、子どもとロールモデルになる大人との交流の場の充実	33.5
5. 料理をする力や健康を考えた食品を選ぶ力をつけるための食育の推進	34.1
6. 保護者が孤立せず、安心して子育てができるよう、相談・交流の場の充実	63.7
7. 保健師や相談員などの専門職員による養育困難家庭への支援	49.7
8. 発達に課題のある子どもや不安を抱えた家庭などに対する早めの支援	55.3
9. 円滑に小学校教育に移行できるよう、就学前教育の充実	30.7
10. 学ぶことや働くことについて考えるキャリア教育	40.8
11. 若年者の就労支援	43.0
12. 高校中途退学者の再チャレンジのための支援	49.7
13. 子ども食堂などの食を伴う居場所への支援	45.8
14. 乳幼児から高校生まで年齢に応じた子どもの居場所の充実	50.8
15. 健康や性の相談ができる場の充実	35.8
16. その他（ ）	7.8
17. 区の対策は必要ない	0.6
18. わからない	0.6

問 13 区では、子どもの貧困対策を考える機会や活動する人を増やすために、定期的に講演会や交流会を開催しています。あなたは、子どもの未来を応援する講演会や交流会に参加してみたいと思いますか（○は1つだけ）。

1. 参加してみたい	75.4%	2. 参加したくない	23.5%
------------	-------	------------	-------

問14 あなたは、今回の調査を実施することで、区民のニーズや意識を把握することができ、区政の改善につながると感じますか（○は1つだけ）。

1. そう思う	44.7%
2. どちらかといえばそう思う	38.5
3. どちらかといえばそう思わない	7.8
4. そう思わない（理由： ）	3.9
5. わからない	4.5

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。